ある「右派」家族の告白

——文革末期から名誉回復までの苦難の日々——

朱　沢　秉　作

解題・編訳・注　李　　青

はじめに（解題）…… 3
本　　編…… 9
1. 撫州師範学校の生活　9
2. 静かな恋情　11
3. 仕事配属の難題　13
4. 初めて山間部へ行く　14
5. 豚頭の校長　ぼろ肉の教師　16
6. 教師は販売店員よりも身分が低い　17
7. 特権のないところはない　18
8. 前途多難　20
9. 山間部に派遣される人はどんな人か　21
10. ある教師の運命　23
11. 父の心のなか　26
12. 多事の秋　28
13. 匿名の手紙がもたらした訃報　30
14. 破られた大学への夢　35
15. 海の底に沈んだ希望　37
16. 父親の履歴　38
17. 父のいた強制労働農場　42
18. 右派言論・その一
——『なぜ適当にごまかすのか』——　45
19. 右派言論・その二——『政治と実務』——　48
20. 右派言論・その三——『党性と宗派性』——　51
21. 奔走し訴え続けた一年　54
22. 困難に満ちた名誉回復への路　57
23. 北京へ陳情に行く　60
24. 予想外の特別な措置　63
25. 無実の罪を晴らす　66

はじめに（解題）

もし，近現代の中国で最大の災難は何かと問われれば，私の答えは次の通りです。一人一人の天性と自由の剝奪である，と。……私たちはまさに一つの専制の中から歩み出して，また身を翻してもう一つの専横の中に落ち込んでいくようなものです。

上記の一節は章詒和（しょういわ）が著した『嵐を生きた中国知識人』[1]のなかの言葉である。章詒和氏は1958年に毛沢東が引き起こした「反右派運動」[2]で大物「右派」とされた章伯鈞（当時は中国民主同盟副主席・中国農工民主党主席などの要職に就いていた）の娘である。父の失脚で娘も長く投獄されることになった。中華人民共和国建国後（以後は建国後と略す）に，絶え間ない政治運動が人々に多大な精神的苦痛を与えた。上記の言葉はまさに中国の建国後に血の洗礼を受けた者の悲痛な叫び声と言えるだろう。

建国直後に，毛沢東をはじめとする共産党政権は新政権を強化するために，経済政策と共に，相次いで政治運動も繰り広げた。土地改革（1950年）[3]，反革命に対する鎮圧運動（1951年――52年，三反五反運動とも言う）[4]，農業合作化によるいわゆる大躍進運動[5]（1953年）などである。意気揚揚としていた毛沢東は建国早々に，実現不可能な「 5年でイギリスを追い越し，15年で米国に追いつく」という経済目標を立てていた。新中国を建設するには，知識人の参加は必要不可欠である。しかし，当時の知識人は旧社会から渡り歩いてきたブルジョア階級の人がほとんどであり，彼らの大多数は重要視されておらず，共産党の外縁的な存在であった。51年の毛沢東による『武訓伝』批判[6]，52年の梁漱溟（りょうそうめい）批判[7]，55年の胡風らの逮捕[8]など，建国後の一連の政治運動は彼らにとっては，決して気持の良い出来事ではなかったであろう。政治からもたらされた恐怖のために，

彼らの大部分は傍観者的態度を取らさざるをえなくなり，内心では不満，反感と抑鬱を感じている者が少なくないことが後の政治運動で分かった。

このような政治情勢の下で，1956年 1月14日に中国共産党中央政府は知識人問題会議を開いた。席上では周恩来首相（当時）が「知識人問題について」という報告を行った。報告の中では知識人はすでに労働者階級の一分子であり，知識人の登用，待遇，労働条件について改善すべきだと提唱した。20日に毛沢東が閉幕式で発言し，科学文化を学習し，共産党外の知識人と団結するようにと党全体に呼びかけた。

続いて，4月25日に毛沢東は政治局拡大会議で「十大関係」の報告を行った。第七条に中国共産党と民主諸党派について，「長期共存，相互監督」のスローガンを打ち出し，28日，毛沢東が「百花斉放，百家争鳴」[(9)]の方針を提起した。文学文藝活動と科学研究活動において自由な考えを持つことが許された。党外人士，いわゆる知識人が共産党への提言や官僚主義への批判を積極的に発言するように促した。緩やかな政策は知識人たちに歓迎され，多くの知識人はこの政策に応えるように，さまざまな形で共産党に真摯な意見や鋭い批判を呈した。しかし，こんなにも深く大きな落とし穴がしかけられているとは誰も予期しなかった。

1957年 5月27日に毛沢東が「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」の講演をし，続いて中央は「整風運動についての指示」を出した。知識人たちから共産党への批判に危機感を抱いた毛沢東は，彼らの行動は共産党政権を揺るがす行為と見なし，「反党勢力」はブルジョア「右派」とし，彼らに対する徹底的な弾圧を指示した。空前の大粛正―反右派運動が始まった。

運動は共産党を批判した知識人だけにとどまらず，彼らと意見の近い人まで連座させられてしまった。運動はますますエスカレートし，党から各職場に対して一定の割合の人を右派とせよとする指示があり，右派の範囲は一気に拡大

され，55万人が右派と認定された。彼らは正常な日常生活を奪われ，職場から連行され，生家から追われ，辺鄙な農村で強制労働を強いられるようになった。問題はこれらの右派本人ばかりではなく，彼らの家族にまでも波及してしまい，その子弟たちは進学，就職などの面において，不当な差別を受け，政治的・社会的参加も制限された。

文革の収束後に，右派問題がようやく再審議され，80年代前半に大部分の右派は名誉回復された。「右派」とされる日から，名誉回復されるまで彼ら及び家族は長い年月にわたり，ひどい仕打ちを受けてきた。しかし，すべての右派にとって名誉回復の道のりはけっして順調ではなかった。人間としての潔白，尊厳を探し，その正義を求めることは容易ではなかった。

ここではある「右派」だった息子の手記を紹介したい。歴史の一コマを正視すると同時に，現代知識人の悲哀を探ってみたい。

手記の著者は朱沢秉（しゅたくへい）である。父親の朱沛人（しゅはいじん）はある日，突然逮捕された。罪名は「反革命」と「右派」だという。父親の朱沛人はかつて国民党の機関誌南京『中央日報』の総副編集長を勤めており，北平『世界日報』の総編集長を歴任していた著名なジャーナリストである。朱沛人は旧時代の知識人として，暗黒社会の不合理に憤懣した。ゆえに，新社会の到来に，一抹の希望を抱いたとしても不思議ではないかもしれない。国民党が台湾へ大撤退するときに，彼は毅然として大陸に残り，共産政権の新中国の到来を心待ちにしていた。しかし，情熱を持ち，大志を抱いた朱沛人は新政権に歓迎されなかった。国民党から寝返えってきた人間はそもそも共産党に信頼されるはずがなかった。再就職は国民党の人間だったということで，いたるところで断られ，徹底的に差別を受けた。この時点で，朱沛人が味わった物はいったい何だったのだろうか。これまで人々に尊敬されたジャーナリストの自負，真実を書き続けてきたジャーナリ

ストの良心，知識人としての誇り……理不尽な差別と無知の前でひどく傷つけられたに違いない。

振り回されたあげく，就職先はようやく『大公報』に落ち着いた。不遇にもかかわらず，「百花斉放，百家争鳴」が提唱された束の間の自由な一瞬でも，一ジャーナリストの使命を忘れることがなかった。党内部に現れた官僚作風に苦言を呈する意見を活字にして発表してしまった。これが右派にされる決定的な好材料になった。

逮捕時に，朱沛人は北京『大公報』の理論部の編集記者だった。

災難は一気に家族にも降り注いできた。小学校 4年生だった息子朱沢秉氏もどん底に転落した。わずか10歳の少年がどうしてこのような残酷な事実を受けとめることができるだろうか。父親の逮捕によって，家族は社会からゴミのように突き放された。教師だった母親は夫が罪人と断罪されたが故，当然教壇に立つことは許されなかった。町内会の冷たい視線にさらされる中で，労働させられた。貧困，疾病，政治迫害によって，母親の体は次第に蝕まれていた。ついに母はこの世を去る。母親のあまりにも速すぎる死は家族の離散を加速した。兄姉たちは生活苦と政治的な差別から地方に行ったり，進学を断念せざるえない選択をした。

一夜にして犬っころとされた朱沢秉少年は，学校からの批判や周囲の差別から逃れることがなかった。高校を出た後は父親のことで大学への進学を遮断され，住み慣れた我が家――北京に止まることさえも許されなかった。残された道は辺鄙な過疎地への流刑――下放(かほう)[10]だった。この下放は建前では，一応毛沢東の「上山下郷(じょうざんかきょう)」[11]の呼びかけに応じての行動であった。

これまで六人家族だった朱沢秉一家は，彼が北京を離れる前に，彼一人だけになってしまった。父は逮捕された後に，重要犯罪人を収容する極寒地である黒竜江に移送されてから，生死不明の上，消息も途絶えたままである。母は息

を引き取る前に最愛の父に会えず，恨みを飲んで世を去った。兄姉たちは相次いで北京の家から追われる羽目になった。

下放された江西省の農村は，幸いにも親戚が住む街に近かった。彼らは両親を失った朱沢秉氏を精一杯思いやった。

しかし，毛沢東の呼びかけスローガンである「知識青年が農村に行き，貧農下層中農から再教育を受けることは大いに必要だ」に応じて来た若者にとっては，農村での暮らしは楽なものではなかった。劣悪な環境と戦いながら，原始的な重労働も強いられていた。精神的な潤いはまったくないと言って良い。厳しい生活に耐えきれず，若者たちはついに逃げ出す人がいた。コネクションのある人や労働者の子弟，いわゆる出身の良い人たちは街に戻りはじめ，朱沢秉氏のような出身の悪い，何のつてもない者は成り行きに任せるしかなかった。

転機が訪れたのは，師範学校の教員募集があったからである。長い間，あらゆる屈辱に耐えてきた朱沢秉氏は山村の教師になったときに，嬉しかった。いつか街に戻り，釈放される父と兄姉たちと団欒したいという，ささやかな希望を胸に抱き，明るい未来を心待ちにしていた。しかし，運命を変えるのはたやすいことではなかった。政治的ないたずらは常に人間の人生を翻弄するのである。やがて，父親の獄死という残酷な現実を突きつけられることになる。何という運命のいたずらなのだろう。

文革収束後に，「右派分子」の再審査が行われ，右派のレッテルは誤認と認定され，名誉回復された。しかし，父朱沛人の案件はなかなか満足のいく解答が得られなかった。朱沛人の娘と息子は父の人間としての尊厳，ジャーナリストとしての誇りを取り戻すために立ち上がった。彼らの奔走，叫び声，告訴はいずれも血のにじむような営みだった。彼らの長い戦いは父親の潔白を証明するためのものだった。無実の罪を晴らしたかったのだ。

今日では，朱沛人に押しつけられたすべての罪状が解かれ，無実であること

が証明されている。

反右派運動から半世紀も経ち，55万人もの「右派分子」の大半がすでにこの世を去った。朱沛人のように冤罪を負いながら，ひたすらに解放される日を待ち続け，無念な結果を迎える人は少なくなかった。彼らの子女もまた老境に入っている者がほとんどである。心の傷は癒えることがあるのだろうか。

朱沢秉氏の原作は『狗崽子雑記』(『いぬっころ雑記』)である。中国国内で未刊行のため，本人の許可を得て，段階的に日本で発表する運びとなった。これまでに『ある知識人の半世紀の歩み（壹）――「反右派運動」から「文化大革命」までの軌跡――』（李青・細井和彦共訳　『中国学論叢　若槻俊秀教授退休記念』大谷大学文藝学会　2007年 3月）と『ある知識人の半世紀の歩み（弐）――「反右派運動」から「文化大革命」までの軌跡――』（李青・細井和彦共訳　『文藝論叢』第70号　大谷大学文藝学会　2008年 3月）というタイトルで原作の第一章と第二章を解題・翻訳をし，発表した。内容は著者の父朱沛人が逮捕される日から「上山下郷」の収束までのストーリーであった。今回は原作の第三章に当たる部分を解題・編訳をした。この部分は単独に独立した内容になっている。「上山下郷」先の片田舎から街の師範学校への入学が許可され，長年の下放生活にようやく終わりを告げることができた。著者の田舎教師暮らしから父の名誉回復の長い道のりが克明に描かれ，血と涙が滲む内容に思わず胸が痛み，涙がこぼれてくる。

ここで朱沢秉氏の手記を発表することによって，かつて中国の歴史上の知識人に対する弾圧の真実を暴露することによって，後生に警鐘を鳴らしたい。このような歴史は決して繰り返してはならない。そして，迫害され，無念の死を遂げた朱沛人をはじめとする多くの「右派」――中国の真に優秀な知識人たちの霊を慰めたい。

本　　編

1.　撫州師範学校の生活

撫州(ぶしゅう)師範学校[12]は当時今からすると不可思議にしか思えない名前がつけられていた。江西省撫州地区五七教育学校[13]という。1968年，短大，専門学校，大学をすべて農村に行かせる命令によって，学校は撫州市から黎川県[14]樟村へ移転した。僕たちが入学した1972年は，学校はすでに人手に渡っていて，さらに撫州郊外の金石山に移り，教育器具もほとんどなくなるという損害を受けていた。一年後やっと撫州市内に移り，撫州師範という元来の名前を取り戻した。“文化大革命”によって，学校は新入生の募集をやめ，ただ短期訓練クラスだけ開講しており，民間の教師を相手に育成し訓練していた。訓練に参加していた学生は一人ずつ毎月10数元の生活費を与えられていた。訓練の期間は短くて半年，長くても一年もしくは一年半であった。しかし一度訓練を受けたなら，民間の教師が役人の待遇を受けられる公務員の教師になれるのである。それは一つにクビの心配がいらない，二つに衣食の問題が解決できるという，民間の教師にとってはみんなが憧れる，願ってもないことなのである。

学校はいくつかの専門に分かれていた。国語，数学と理科，数学と物理，音楽と芸術，体育などがあった。学生は撫州地区の各県各市から来ていた。上は30歳以上で妻子のあるものから，下は16，7歳の見たところまだ幼いものまでいた。学歴もまちまちで高卒から実際は小学生レベルの中卒までいた。ある学生は今中学生を教えていて，ある学生は小学生を教えていた。がしかし，設けている専門科目から見れば，目標はやはり中学教師を育てることであった。

僕は国語の第二班に配属された。毛主席の著作と魯迅の著作を主に毎日勉強

した。授業で覚えているのは毛主席の七言律詩の詩を一首，文字はたった56文字で先生は教壇でよどみなく８コマも話し続けた。時代背景から国内外の情勢まで，共産党内の２大政策路線の闘争から，国民党と共産党の生死をかけた闘争まで，マルクス・レーニン主義から毛沢東の偉大さまで，歴史発展の規律から詩を作ることの現実的な意味まで，字の訓詁から関係のある典故まで，創作の特徴からそれによってもたらされたものまで，過去から現在にわたって，論拠となるものを豊富な資料から広く引用すること，全てを網羅するように，表面から内側まで，その広範な連想，細密な分析，深くまで探ること，詳しく述べることだった。いたるところに入り込むということしかない，常に聴衆をあっけにとらえさせて，考える隙を与えないものだった。しかし，あの時は授業をすることにもこのような技術が必要だった。なぜなら国語の授業では，たとえば，基礎知識，文章の閲読，作文など，許されているのは毛主席と魯迅の文章以外はほぼ全て禁忌の類になっており，数多くある授業をやりくりするには，ただ毛と魯迅の文の小さな範囲に細かく手を加えるしかなった。そうでなければ限りのある何篇かの文章の授業が終わってしまえば残りの時間何をするというのだろうか。

「文化大革命」の期間中であったにも関わらず，撫州師範学校の学校生活は相変わらず北京第五中での生活よりも楽しいものであった。学生の中には「紅五類」[15]も「黒五類」[16]の区分けもなく，クラス主任も決して毎日「階級闘争の新しい動きをしっかりとつかみ取ろう」とは声高に叫ばなかった。ただ，表面的には各地には共産党の組織が置かれており，皆中央のテキストで勉強し，林彪[17]の罪状を批判してはいた。学生たちは各々の県や市から来ていて，年齢と文化にある程度の差異はあったが，決して身分や地位の高低貴賤による分別はなかった。僕の学生のクラスには党員はただ一人だけで，彼が自然と僕たちの班長となった。また他のクラスにいた幾人かの共産主義青年団は青年団支部と班委

員会を組織した。彼らはクラスのあらゆる行動の責任を負い，生活支援の仕事をも包括しており，正真正銘，学校のための組織であった。しかしクラスのこれら幹部のほとんどは既婚者の青年たちであって，一年後，彼らの家族を養うために，学校は彼らの学業の短期修了を認めた。彼らが学校を離れた後，班・委員会は顔ぶれの大幅な入れ替えがなされ，僕は学業成績が突出していたため，学習委員に選出された。これがもし北京第五中であったなら，まったく想像もできなかっただろう。このことは僕に南城に下放されて間もない頃のことを思い起こさせた。かつて僕は北京市内で同級生であった友人から黒龍江から郵送されてきた手紙を受け取った。彼は北京から離れて生産建設部隊に下放された後，非常に早く共産主義青年団組織に入れてもらい，感慨深く思い，比べるべくもないほどに誇りに思っている，と記されていた。彼のように「紅五類」の出身ではない人間が入団できるなどというようなことは，北京市内にあっては絶対に想像もできないことであった。あの時代，北京市内では「紅」色の背景を持たない家庭の同級生が団員となろうと思うことなど，一般庶民の娘が皇太子妃として選ばれるようなもので，天に登ることよりも難しいことだったのだ。僕はこのことによって，北京は結局のところ北京であり，革命の堅固さ，徹底ぶり，純正さ，厳格さといったものは遠く全国には行き渡ってはいない，ということを知ったのである。

2.　静かな恋情

専門科目の授業はますます退屈なものになった。学校の図書館はとっくにぶち壊され，閉鎖されてしまっていた。本を借りるところもなく，手元にたった一冊薄い教科書のみが残っているだけだった。中身は読み飽きていた毛沢東と魯迅の数編の作品だった。最初は先生のほら吹きを真剣に聞いていたが，やが

て白けてしまった。しかし，キャンパス内の生活は毎日畑仕事をする農村よりずっと色彩豊かだった。若者が集まると，どこか活気に溢れている。クラスメート同志が互いに親しくなると，押さえきれない激情が沸き起こり，多くの者が恋愛に酔いしれていた。

「文化大革命」は多くの若者の結婚年齢を遅らせた。今は，師範学校に入学した学生にとって，どの学生も将来の生活が保障されることが分かっていた。学校では恋愛が禁じられているが，愛情は閉じこめられない野ウサギのようにキャンパス内をひそかに走り回っていた。

当時，クラスのある女子学生は僕の住む男子寮によく来て，あれこれと世間話をしていた。彼女の性格は外向的で，しゃべり出すと声が大きくて，自由気ままだった。ふっくらした顔に，丸い体つき。どこから見ても，人に好かれるタイプではなかった。というわけで，僕が彼女の積極的なアタックに特別な感情をもつこともなく，綺麗な女性と一緒にいるときの緊張感や堅苦しさのようなものもなかった。加えて，犬っころの身分では，余計な感情を持つことも許されることではなかった。当然，彼女が男子寮で僕と長話していても，人々の注意を引くようなことはまったくなかった。しかし，彼女は僕の家庭状況についてすぐ聞いてきた。およそ一か月がたったある夜のことである。彼女は積極的に校外へ散歩に行こうと誘ってきた。これは今までなかったことであり，僕は不思議に思った。僕たちは学校の裏の小道に沿って，ゆっくり散歩した。彼女は悲しそうな口調で切り出した。家族に僕との交際を反対されたと。原因は僕ではなく，僕の父親にあるということである。つまり，彼女の家族に政府機関に勤めている人がいて，家族が相手の出身階級にとても厳しく，彼女は家族の意見を受け入れるしかないというのである。僕は黙って，彼女の弁解を聞いた。心は水たまりのように，静かで，何の感情の起伏もなかった。今から考えれば，この恋はおそらく彼女の一人よがりであって，僕は乗り気にならなかっ

たからだろう。あれ以来，彼女は二度と僕の寮に来ることはなかった。

僕たちは1973年の夏に卒業することになっていた。学校を離れる数ヶ月前に，僕と親交のある数人のクラスメートは僕の結婚問題に対して真剣に奔走し始めた。彼らは進んで，仲立ちをし，同じく南城県の撫州から下放された女性を紹介してくれた。あの時に，僕は家庭問題と困窮する経済状況があったために，返事することを躊躇していた。犬っころの身分で，一文無しの者に結婚問題を考える余裕があるのだろうか。友人たちは相手が労働者の出身にもかかわらず，僕の家庭問題を意に介さない，気に病むことがないと保証してくれた。そして，あまり悲観的にならずに，早く覚悟を決めるようと催された。僕はクラスメートの友情についに動かされた。彼女と縁があったかもしれないが，この小柄だが，世界でもっとも尊い資質を持っていて，優しい上に，しとやかで，しかも聡明で器用な女性とややぎこちなくではあったが一緒になることに決めた。彼女が僕の妻となった水嬌（すいきょう）である。

3.　仕事配属の難題

これらの学生の卒業前，学校では教師が不足しており，僕たちの中から幾人か成績の優秀な者を選び，学校に留まらせることを考えていた。国語専攻班は，僕と同じ班の鄒鎮が候補として上げられていた。鄒鎮は文章が上手いだけではなく，音楽・芸術や体育も他者にひけをとらず，若くても才華がある人物だった。ところが，僕たちは二人ともこの選考に選ばれなかったのである。原因は彼の父親が右派であり，また僕の父親も反革命者であったためであった。後から学校は国語専攻班から別の二人を選出し，僕たちを学校に留まらせた。この事は僕に自分が「犬っころ」の身分なのだということを改めて思い知らされ，また社会的な地位がないことも認識させられた。

僕たちが県内に帰った後，まもなく新たな任教地へ分配されるということを聞いた。そこで僕は僕たちを率いて帰る撫州師範の隊の引率者の教師を探し，彼に僕と水嬌の関係を説明し，僕たち２人が同じ場所で働けるよう希望した。隊の引率者の教師はとても快く承諾してくれた。ところが，彼が県の改革委員教育組織の会議から帰ってきた後，教育組織の指導者は僕たちが恋愛関係にあることを聞いて，とても不愉快となり，分配の結果如何については，今のところ何とも言えないのだと僕たちに告げた。僕たちはこれを聞いて大変がっかりしたし，反感も抱いた。組織の指導者はあまりにも人情味に欠けているではないか。僕と水嬌は，26歳と24歳で，とうの昔に法律で定められた結婚可能な年齢を過ぎていた。それなのに，ただ現在恋愛関係にあることがはっきりとわかっているだけで，どうして嫌な顔をされるのだろう。彼らにも子供がいて，子供が大きくなれば恋愛をして結婚し，子供を生むだろうに。

二日後，分配の結果が知らされ，僕は潯溪（じんけい）人民公社[18]へ，水嬌も潯溪人民公社への配属となった。教育組織の指導者はやはり僕たちの要求を顧みてくれたのである。このことに僕たちは心から感謝し，彼らは人を思いやることのできる人たちなのだ，と思った。そのあと僕たちはやっと知ったのだが，潯溪公社は全県の中でも誰も望んで行かないような辺鄙な山岳地帯で，僕たちがそこに配属されるということは，実は何ら恩恵はなかったのである。このことは教育部門のお偉方にとっては仕事を分配する際の不平等な難題の解決と，同時に一種最も重い流刑に処する懲罰的意味をも持っていたのである。

4.　初めて山間部へ行く

潯溪人民公社から街までの道は一本しかなく，街から30km以上離れている。何度も山を越えなければいけないため，観光客はめったになく，そのため乗合

バスは通っておらず，ただトラクターと貨物車が時々往復するだけだった。

僕たちはまず潯溪人民公社に挨拶に行かなければならなかった。聞くところによると小道があり，山に入っていくまでたった20kmと少しなので，僕たちはその小道を入っていくことに決めた。１本の天秤棒を使って，二人の簡単な荷物を担ぎ，僕たちは足を進めた。山を登ったり下ったりえんえんと歩いていると，僕は天秤の荷物を担げば担ぐほど重たくなるように感じられた。僕たちがちょうど山の半分のところでハアハアと息が切れて休んでいる時，後方から二人やって来て，そのうち一人は天秤棒でかごを担いでいてそのかごの中には文房具が入っていた。僕は彼らも教師だろうと見て，話しかけた。やはり彼らはまさに潯溪小学校の教師で，僕が疲れて担げないのを見るとかごを担いでいるほうの先生はためらわずに，僕のかばんと布団を自分のかごにのせると担いでやるよと言った。僕はただ感謝するばかりで，何も言えなかった。先生の姓は王，40歳すぎで四角い輪郭，手足は太くて，いかにも丈夫そうで，しかし名前だけは上品で蘭声といい，強壮でとても温厚に見えた。その後，僕と彼は同僚になった。

潯溪は典型的な山間部で四方を山に囲まれていて，竹林があり，小川の水がさらさらと流れ，見えるところ全て青翠で，避暑には最適な場所である。ここで僕たちはまたどこに配属されて教員になるのか，という問題に直面していた。幸いなことに水嬌は公社の国語の文化教育を担当する胡主任と知り合いだった。彼は彼女が下放で生産隊に入隊した時知り合った，隊をまとめる幹部だった。少し古い間柄ではあるが，胡主任は僕たちの関係を配慮してくれて，同じ学校に配属されるように手を貸してくれた。――それは公社が所属する潯溪小中学校であった。

学校は大きくなく，小学校は 3年から 5年のたった 3クラス，中学校は 1年から 3年の3クラスだけだった。どのクラスも 2，30人の生徒がいた。中学生は

全て，公社のそれぞれの隊から来ていて，学校から遠いところでは 5～10km離れていて，彼らはほぼ学校で寄宿していた。 2年後，中学校から小学校が分かれることになり， 5kmも隔てた坪上村へ移動し，僕と水嬌も別々の学校に配属され，僕は中学校に残り，彼女は小学校へ行った。

5.　豚頭の校長　ぼろ肉の教師

農民と比較すると，僕たちは教師の仕事は高尚だと考えた。配給された食糧を食べ，給料をもらい，年中風雪に怯えることもなければ，衣食が満ち足りない心配もない。羨望しない農民はおそらくいないだろう。しかし，教師になってから，教師の地位がいかに卑しいことかを徐々に感ずるようになった。

学校の近くに人民公社があった。もう少し先まで脚を伸ばせば，県が経営する精肉販売店があり，月に一回豚肉の販売をしていた。配給食料を享受している人には１人あたり月に250グラムの豚肉が配給されていた。肉を販売する日になると，肉屋の前は人でごった返していた。食料品が不足していた年代に，山の奥で豚肉が食べられることは一大事であった。販売日になると，僕たちはいつも早起きし，順番に並んだ。肉屋はまだ営業しておらず，店員は豚肉を裁いていた。開店前に，店内では豚の部位によって，すでに仕分けされていた。豚足，レバー，胃袋，あばら骨……人民公社の幹部の人数分を用意していた。いざ開店になると，店員は見下げた目つきで僕らを睨み，僕らの伸ばした手を押しのけた。僕らの後ろから商店と病院幹部が差し出した配給手帳を受けたり，彼らに優先に売ってあげた。この時に，けっして腹を立ててはならなかった。ここには先着順もなければ，並んでいる者に売る義務もない。肉屋はこの一店舗しかない。肉の販売権はすべて店員の手に握られている。どのように売るか，誰に売るか，彼らの勝手だった。もし，肉が買えなくても，店員から「肉はも

うない，次回にしろ」と冷たく吐き捨てられるだろう。口論にでもなれば，「お前に権力があるなら，人民公社にもう一匹豚を殺させればいいじゃないか。やれるもんならやってみろ」と店員から口をつぐませられる。このようなことは到底できないことは誰でも知っている。だから大人しく口を閉じ，彼らの恩賜を待つしかないのだった。

学校の中では，大家族を養っている校長に権力があった。配給量以外に時々，豚の頭を丸ごとに買うことができた。しかし，悲惨なことに，僕たちのような平教師は配給量の中に豚の腹部の脂身を押しつけられることがしばしばだった。このような肉はこの地方では「ぼろ肉」という。僕たちは潯溪の最高学府には，「豚頭の校長とぼろ肉の教師」ぐらいしかいないと自嘲していた。

6.　教師は販売店員よりも身分が低い

現実の生活の中で，医者は教師よりも地位が高いというのは疑う余地のないことだ。なぜなら誰であろうと，みんな医者に病気を見てもらわないわけにはいかないからだ。それがさらに公務員であればなおさらだ。公費で医療を受けたり，さらには医者にお金を払う必要もなく様々な薬を処方してもらい，家族全員はその恩恵を受けている。教師に何があるというのだろう。何枚かの白い紙とひと山のチョークならあるが。知識にいたってはもはや災いをもたらす悪の根源になっている。その上，全国に限りがあるいくつかの大学しか新入生を募集せず，さらに試験はいらない，全て末端の推薦によって指導者が審査をする。このような状況の中で誰が教師を気に止めるだろうか。

販売員と比較したとしても教師の地位は低かった。その頃，村の雑貨屋では日用品と副食品はほとんど配給切符によって販売するようになっていて，さらによく品切れになった。店員と知り合いになれば買い物に便利なだけでなく，

時には配給切符なしで多く買えたりする。それゆえ，このような本当の話が世間で広まっていた。ある公社の幹部はある教師の仕事ぶりにとても満足していて，彼の肩を叩きながら励ますように言ったという。「しっかりやりなさい。そうしたら将来君を店員に抜擢してあげよう。」これは確かに当時の社会における人々の地位の違いを如実に写し出している。決して全く根拠のない風刺ではなかった。

潯溪での日々は僕の痔をますます悪化させ，僕は立つことさえもできなくなってしまい，ついには病院で一度切除手術を受けざるをえなくなった。手術を受けた後の体は極端に衰弱し，僕はほどなく肝炎を患ってしまったのである。医者は僕が病気であるため500gの砂糖を補給せねばならないことの証明書を出してくれた。あの時代，村の雑貨屋では年に2両（100g）の砂糖が供給されるだけで，そのとき以外は一切一般人には砂糖の供給がなされなかった。僕は意気揚々と医者が書いてくれた証明書を握り締め，村の雑貨屋へと駆け込んだ。しかし店員は冷たくこう私に告げた。「売れる砂糖なんてないね。」そこで僕が彼女にいつ入荷するのか尋ねると彼女はうっとうしそうに，「知らないね」と言い放った。僕は彼女に僕は病気でそのために砂糖が必要なのだ，ということを説明し，彼女が事情を考慮してくれることを望んだのだが，僕の方を一瞥してこう言ったのだ。「病気でも何でも無いものは，無いのよ」と。その後，僕は人から雑貨屋から人民公社の幹部が砂糖を買ったと聞き，また何度も村の雑貨屋に足を運んだけれど，いつも「ないわ」という回答しか得られなかった。

7.　特権のないところはない

たとえ「文化大革命」の期間であり，潯溪のような辺鄙な山間部であっても，僕たちは共産党幹部の特権を見た。年越しのとき，公社は食品販売所に特別に

豚を１，２頭殺させて，幹部たちの年越しの需要を満足させた。そして，雑貨屋には全ての幹部のため，年越しに供給する様々な副食品と日用品を分け与えさせた。大隊や生産隊で，公社の幹部はもっとも安くさらに質量のよい，しいたけ，たけのこ，木材，竹製の日用品を買うことができた。その当時多くの物価は全て２種類あり，権力がある人は価格が低く，質がよいものを買えた。一般庶民は買い物ができるというだけで恩恵を受けているということで，価格は高く，質は悪くても，文句をつける資格はなかった。

公社が新しく派遣した徐という秘書はかつて僕の家に客としてやってきて，僕に言った。「私は水嬌と下放以来の知り合いなので，徐さんと呼んでくだされば結構ですよ」と。しかし僕は彼に「外ではそのように呼ぶことはできませんよね」と言うと，彼は少し考えて，目を細めてニコニコしながらうなずいた。「外ではやはり私を徐秘書と呼んでください。徐さんと呼ぶと，人はあなたがどのような身分か分からない。それは都合が悪いです」と。公社の幹部というだけで，どこへ行っても歓迎されたから，身分関係は絶対に明らかにするべきだった。もし僕が「徐さん」とみだりに呼ぶと，彼を僕の同僚つまり中学の一平教員，と誤解する人がいるかもしれない。これは徐さんにとって損になるのだ。

北京五中で勉強していたときに覚えているのは，政治の先生が僕たちに言ったことである。ソ連はすでに修正主義国家に変わった。ソ連の上層部はすでに特権階級になり，彼らはマルクス・レーニン主義を裏切った。絶えず広大な労働者の血と汗を犠牲にしている。実は，特権階級は絶対にソ連の専売特許ではない。中国でも中央であろうと，地方であろうと，同じようにどこにでもある。どんな人でも少しでも権力があると，それをふりかざして，自分は搾取をよしとしている。中国の共産党幹部たちは利益，楽しみなどを享受しており，兄貴分のソ連と少しも変わらない，勝りこそすれ，決して劣ってはいない。

8.　前途多難

野菜を食べるための困難を除けば，潯溪でもっとも大変だったのは外出することだった。夏，冬の休みごとに学校の食堂は閉められ，先生と生徒は次から次へと家に帰って行った。水嬌は撫州の人であったので，僕たちはいつでも夏と冬の休みを利用して撫州へ行っていた。潯溪から撫州へ行くには街にある長距離バスがなければならない。しかし街に行こうと思えば，大変やっかいなことだった。街に行く前に，街へと向かう貨物車やトラクターを探さねばならないが，これでもしあったとしても，運転手に声をかけてはならないし，声をかけても運転手は必ず良い表情を見せてくれないだろう。だから，車が発車する直前に荷物が満載の車両にこっそりよじ登るのである。車の運転室にはきちんとした座席もあったが，ここに座りたいなどとは決して思ってはならない。なぜならここには人民公社の幹部や大隊の書記，村の雑貨屋の主任，また病院の院長やその親しい友人などが専ら座るための席なのである。もしあなたがそっと車両の上によじ登ることができたなら，それは大変誇れることだ。多くの人が車を取り囲んでいると，運転手は目に入る人々を睨みつけ，遠慮なく乗り込んでいた人を引きずり降ろし，さらに車に近づくことをまったく許さず，何を叫んでもどうにもならないのである。

僕が覚えているのは，僕たちが潯溪に来て２，３年経ったある夏の日のことだった。もう夏休みに入っていたあの日，僕と水嬌は一度撫州に帰ることにした。村の雑貨屋の門前の道路に潯溪大隊のトラクターが一台，荷物は積み終わっており街に向けて出発の準備が整っていた。運転席を見れば人の姿はなく，水嬌ともう一人の街に行こうとしている夏先生という女性の二人が喜んで運転席の後ろに乗り込んだ。潯溪大隊の先生が大隊のトラクターに乗り込むことは

当たり前のことで，ましてや学校を卒業したての運転手ならなおさら問題ないだろう。しかし幹部でもない二人があらかじめ乗っていたため，トラクターは遅々として発車しなかった。最後には大隊書記が顔いっぱいに不満を浮かべながら車の前に現れ，二人に向かって叱責し，座席から追い出すとトラクターはようやく発車したのだった。

9.　山間部に派遣される人はどんな人か

山間部ということで，潯溪に人を派遣することは非常に困難だった。特に中学校の校長，校長はまず共産党の身分であるということが絶対条件である。当時，潯溪の教師の中には一人の党員もいなかった。知識分子は鼻つまみ者（臭老九）[19]に相当するので，教師が入党するのは天に上るよりも難しかった。僕が赴任して来た年に，どこの機関から探してきたのか，一人の党員の幹部が潯溪の中学校に校長兼教育事務室の主任として派遣されてきた。彼は40歳すぎの農民出身で，家族は非常に多かった。お金を節約するため，紙巻きたばこの他に，刻みたばこもよく吸っていた。彼はとても長いキセルの雁首を持っていて，会議のとき，いつもうまそうに煙草を吸って，その雁首を叩いてパンパンと音を鳴らしていた。話をすると見下ろすような顔つきで態度はかたくな，いつも叱責するような目でじろりと見た。性格も頑固で簡単には人の意見を聞かないので，学校の教師たちと衝突しては気まずくなっていた。

彼は教育には口を出さず，重点は労働に置いていた。いつも学生を組織して柴を割り公社所属の機関，職場の食堂に売り，時には大量に他の公社に売っていた。ここらの山は生産隊に属するものなので，生産隊は彼に不満があった。教師たちとの関係も始終ぎくしゃくしていたので，３年後彼は異動していった。

後任は新しく養成された党員幹部で，隣接している公社からやって来た。潯

溪で１，２年経験を積むように言われてきたのだろう。彼はとても細心で頭が切れ，人との関係もとてもよく，誰か困ったことがあればすぐに解決することを約束してくれた。公社の教育事務室の主任という職務も兼任しているので，大部分の時間は様々な大隊をぐるぐる回っていた。いつも酒のにおいがしており，上等な木材としいたけを買った。木材としいたけを使って県の親玉とつながりを付けていたのだ。それは潯溪幹部の専売特許だった。彼はすぐに山間から異動した。残されたのはたくさんの実現しない美しい約束だけだった。

次に派遣されてきたのは，城関（じょうかん）中学校の元校長で，造反派[20]と共に県の革命委員会を砲撃したために，結果山に左遷された。彼は南城人ではなく，山間部で一定時間仕事をすると，ここには何の活路もないと見て，故郷に帰れるよう上申して帰っていった。次に校長を引き継いだのは工農兵大学生[21]として卒業したばかりで，すでに共産党員になった潯溪人だった。彼の存在はまさに，日照りに雨，山間部の人材不足を解決してくれたのだった。

山間部のような辺鄙な場所に派遣された教師は，大多数が県内に強いコネを持っていなかった。鄧という女性教師がいたが，彼女は定年退職するまでずっと潯溪中学で働いていた。彼女はもともと都市で教師をしていたのだが，1957年右派の烙印を押され，すぐに長期下放されこの山間の地にやって来たのだ。学校の中の彼女は口数少なく寡黙で，どんな事情か分からなかったが，評論にも加わることはなく，ただ一途に自分の息子の世話をしていた。彼女の息子は17，8歳で，彼女に決して良い感情を抱いておらず，むしろ聞くところによると彼女に対して母親のせいで自らの前途が潰えたのだと，とても怨んでいたそうだ。僕は今でもこの女教師の寂しげで，憂鬱げな眼のことを覚えている。

僕と同じ時期に潯溪中学に派遣されてきた人の中に工農兵出身の大学生がいた。彼の父親は生産部隊の幹部なのだが，自分の子供が大学で勉強していることを大変誇りに思っていた。彼はことあるごとに，僕たちに対して自分の息子

の字がいかに美しいか，いかに聡明であるか，この地域でいかにずば抜けているかということを，ひけらかしていた。しかし残念ながらこの息子は意気地なしで，大学のときに恋愛問題で精神錯乱に陥っていた。それが治ったあと，学校教師としてやって来たが，一年足らずで再び病気になった。眼はどろりとなり光を失い，何事かをぶつぶつと呟くなど日に日に病状が悪化して精神病院に送られ，遂には廃人となってしまった。

それ以後潯溪中学に派遣されてきたのは，そのほとんどが師範学校の卒業生で，しかもよその地の出身者だった。僕が覚えている中でも一人は南昌の知識青年，もう一人は上海の知識青年だった。数年後，彼らは自らの力で一人は街の省属の工業専門学校へ派遣され，もう一人は上海に呼び戻され，帰って行った。またもう一人，師範学校の卒業生で，徐という姓の人物がいたが，私が覚えている限りでは臨川県の生まれだったと思う。彼は潯溪中学に派遣された後，その地の女性と結婚した。しかし数年後病気を患い年若い妻とまだまだ幼く庇護の必要な子供を残し，夭折してしまった。

10.　ある教師の運命

潯溪人民公社の教師のなかで，王蘭声（おうらんせい）が一番印象に残っている。潯溪小中学校がまだ一つだった時代に彼が総務をやっていた。彼は温厚な上に，勤勉であり，落ち着いていて，黙々と事をこなしていた。学校の総務はけっして楽な仕事ではなかった。毎週町に出て，野菜を仕入れに行った。車に便乗できなければ，徒歩でいくつもの山を越え，天秤棒で野菜を担いで帰らなければならなかった。しかし，彼は自分の仕事の苦労話をすることはなかった。誰かに困ったことがあれば，彼はいつも喜んで手をさしのべた。彼も数コマの授業を担当していたが，いつも忙しさに追われていた。学校の教職員と生徒は数百人にも及

び，物品の購入から職探しまで，彼らの生活のすべてに王蘭声が関わった。

人民公社の教員総大会を開催することになれば，彼はまためちゃくちゃに忙しかった。食料品や食器の調達をしたり，参加者の席順を作ったり，会場設営をしたり，お金の徴収や会計報告……どの仕事も彼抜きではできず，いつも忙殺され，ご飯を食べる暇もなかった。

しかし，教師の中では，彼はまた一番よく怒られていた人である。農民出身の校長は親父が息子をしかりつけるような口調で彼を責め立てることがしばしばであった。計画性がない，慌てん坊，けちくさい，手配が乱れている，忘れっぽい，頭を使わないなど，場合によっては，首筋を真っ赤にして，彼を怒鳴りつけることもあった。しかし，彼はせいぜい小声で二言三言弁解するだけで，ほとんど頷くばかりで，口答えをしたことがない。ひどくいびられる時には，もう息を潜めるしかなかった。

王蘭声がけちくさいと言われていたが，それは彼は買い物をするときに，常にもっとも安い物を選び，数量もきっちり計算し，余分の物は絶対買わないからだった。これはおそらく彼自身の貧困生活と関係があるだろう。彼は40数元の給料をもらっているが，５人の子供を養わなければならない。経済的に余裕がなく，一貫して倹約し，一銭たりとも無駄遣いをしなかった。彼は煙草を吸うが，祝祭日以外に，紙巻き煙を絶対吸えず，年中キセルを持ち歩いていた。食事はもっと質素だった。食堂で肉入りのおかずを買うと，大事そうに何日も分けて，食べていた。多くは大盛りのご飯にわずかな漬け物だけだった。これが彼の一食であった。

潯溪の教師のなかでは，王蘭声の質素倹約の笑い話が流布していた。それは一個の塩漬けのアヒルの卵を1日3回のご飯に分けて食べることだった。これは実に悲しい話である。栄養失調のために，彼は顔色がろうのように黄色かった。仕事は雑用で忙しく，物忘れをしても仕方のないことだった。潯溪小中学校が

分離するときに，校長は彼の仕事ぶりにますます不満を募らせ，潯溪まで５キロ離れたある村の小学校に異動させてしまった。

王蘭声の家は潯溪大隊の坪上村にあった。新しい赴任先は遠くなったが，彼は満足していた。僕は彼に村で教えることはどうだと尋ねたことがある。彼は笑いながら「村で教える方が良い。疲れないから」と心から言ってくれた。しかし，彼が転勤してから，教員たちはいつも彼を思い出していた。赴任してきた新しい総務係は聡明そうだけれど，勤勉さは彼の十分の一もなかった。

だいたい一年余たった頃，新校長がやって来た。王蘭声はまた潯溪中学に派遣され，再び総務の仕事をした。

彼は相変わらずあの頃のようにまめであったが，身体は徐々に弱ってきていた。高く大きくてたくましい，まじめで穏やかな中年の男は，角張った大きな骨だけが残り，頬骨は突き出て，目の縁は深く窪み，顔色は黒味を帯びた黄色，眼光は暗く濁り，唇はいつも青紫色をしていた。彼はだんだん重い荷物を担げなくなり，反応もとても鈍くなって，仕事をするのもやっとのことだった。潯溪に来てから診療所に診察に行く数もだんだんと多くなった。すぐに，潯溪からまた異動になり，近所の大隊小学校の教師になった。

彼は実は心臓病だった。それから一年ほどたったある日，突然彼の弔報を聞いた。その日，彼は町に診察に行ったが，ホテルに泊まる金を出し惜しみ，診察が終わると慌しく家路についた。まずバスに乗り，徐家公社圳上大隊で降りた。すでに夕方だったが，潯溪まではまだ15kmの山道が残っていた。山道にそってゆっくりと歩いていると，ちょうど彼が教えている大隊のトラクターが後方からやって来て，ついでに彼を乗せてくれた。トラクターが山を登るにしたがって道は険しくなり，路面はでこぼこ，車両は激しく揺れ，まるで人の五臓六腑が一斉に上下に揺れて飛び出してしまいそうだった。健康な人間が座っていても具合が悪いのに，深刻な心臓病患者ならなおさらよくない。王蘭声はす

ぐに持ちこたえられなくなり，車内で倒れた。車内で別の人が驚きの声を上げると，運転手は驚いてすぐに車を止めた。その時，誰もどうすればよいのか分からなかった。運転手は彼が車内で死ぬことを恐れて，何人かに言いつけると彼をトラクターから運び下ろし，道の端に置くと，トラクターは走り出した。大隊に帰ると，運転手は王蘭声の状況を彼の家族に伝え，家族が手探りで道に横たわっている王蘭声を見つけた時は，夜10時過ぎで彼はすでに呼吸が停止し，誰も彼がいつ息を引き取ったのか分からなかった。

学校の先生はみな王蘭声の葬儀に出席した。僕は何年も前の事をまだはっきりと覚えていた。僕が潯溪に派遣されたばかりで山道を歩いていて彼と出会った時の事を。彼は僕が潯溪で初めて出会った教師で，その時，彼は親切に僕を迎えに来てくれて，僕が担げない荷物を進んで担いでくれた。しかし現在，僕たちは黒い腕章をつけて彼を山の上の墓穴へ見送っている。すべてが夢のようだ。数年前の彼は牛のように丈夫で，彼以上に苦労に耐えられる人はいなかったのに，貧しい生活が本来壮健である男をもつぶしてしまった。彼は50歳をわずかに越えたばかりだった。妻は小さく痩せていて，仕事もなかった。長女はすでに嫁に行っていたが，その他４人の子供はまだ学校で学んでいて，一番小さい子はまだ10歳にもなっていない。ささやかな弔慰金に頼って彼女らがこれからどのように暮らしていくのか本当に分からなかった。

11.　父の心のなか

僕と水嬌は1973年の春，婚礼を執り行った。そのとき僕たちはまだ師範学校の実習生であり，夏にようやく正規の教員になる予定でもあった。当時僕の月収は20元にも満たず，ただ自分の食費に足りる程度のものであった。婚礼にふさわしい酒宴を用意するためには100元もの大金を工面しなければならないの

だが，これはもはや天文学的数字であった。小さい頃から今に至るまで，手持ちの人民元が三桁を越えるということはなかった。僕はどのようにすべきか分からなかった。ところがある時，遠く黒竜江にいる父は僕が今度結婚するということを知り，千里はるばる私に40元ものお金を送ってきたのである。僕にとってこれは大金で，何よりの贈り物であり，まさに救いの手となった。父の10年の刑期は早くから満期を迎えていたが，依然として嫩江農場(22)に拘束されており，給料は2，30元にすぎなかったはずである。父が僕に送ってくれたお金がどのようにしてかき集められたものなのか，それは分からないが父はあっさりと僕に寄越してくれたのである。父の手紙の中には，私にはこれくらいのことしかできない，ということだけが簡単に記してあった。僕は父が持ちうるもの全てをなげうってくれたことを知り，感激したり，申し訳なく思ったりした。

1975年，中央政府は拘禁中である県長レベル以上の軍人・政府の役人を全て特赦するよう命令を発布し，併せてすでに就業している同類の人々にも全ての罪を取り除くという処置を行った。父は副部長クラスであったという履歴に基づいて，刑期満了後も政治的権利は 5年間剝奪され，さらにその後 2年が過ぎていた。しかし父の公民権は剝奪されたままで，依然として反革命派と見なされていたのである。農場の共産党組織は中央政府の命令によって父ら十数人に特赦されることを告げた。さらに1976年 3月に会議を招集し，政策大会を実施した際に,「朱沛人に付けられた反革命分子のレッテルを剝がすことをここに言い渡す」として，1975年12月から起算した証明書が交付された。そこで中央政府の規定に基づき特赦人員に対して支度金100元を支給し,職業を改めて手配するということとなった。

父は大変喜んでいた。僕を含めた子供たち全員への手紙には，未来に対する憧れに満ちており，江西省南昌の仕事の配置を希望しているということが書き記されていた。しかし農場の指導者はかつて仕事を手配することを約束したの

に，一年中待っても何ら音沙汰なく，いつのまにかその話は立ち消えとなっていたのである。父は1976年12月，19通目の阿敏への手紙に，仕事の再配置のことについて次のように話している。「例のことには久しく触れていないが，僕はもはや希望が叶うことは望んでいない。ただ家に帰り，一度でも肉親に会いに行くことを切に願うだけだ」と。しかしどうしてかはわからないが，肉親に会うための申請はずっと却下され続けた。1977年 3月，父は農場の指導者を探し出し肉親に会いに行く事と，仕事の再配置の件について尋ねたがやはり回答は何もなかった。そのため父の心は気が塞ぎ，一貫して焦慮と不安の中にあったのである。

12.　多事の秋

1976年の秋は中国の歴史の中で様々なことが起こった年である。

まずは周恩来首相が死去した。彼は共産党内の序列二位であり，当時は人々にもっとも敬愛されていた。しかし，周恩来を追悼する活動は江青をはじめとする「四人組」に鎮圧されてしまった。北京の人々は自発的に天安門広場に集まり，献花をしたり，詩歌を貼り付けたりして，周恩来に対する敬意と「四人組」への怒りを表わしたのである。ついに，4月 5日の清明節に天安門広場の追悼活動は反革命暴動とみなされ，残酷な弾圧を受けた。続いて，黒幕は鄧小平と断定され，毛沢東によって，官職を罷免されてしまった。鄧小平を批判する反右傾闘争運動はたちまち全国に広まった。

町から遠く離れた僕たちのいる山の中でも，今回の政治の嵐によって，大きな波紋が引き起こされた。各部門は学習会を開き，スローガンを張り，すべての人は態度を明らかにし，憤慨することを強要された。人民公社は中学にあるオンボロ講堂で各部門が参加する鄧小平批判大会を催した。

校長は会議で教育局へ行ったため，教育主任の僕は学校を代表して，発言をした。公社の秘書に発言の原稿を求められたが，僕は首を振りながら，ないと，彼に告げた。このような場で発言できる言葉はいずれも新聞に掲載されているのである。公の文章の文言はどれでも同じ内容である。聞くだけで，暗記してしまうくらいなのである。だから原稿まで作成する必要はどこにもなかった。僕もすべての発言者のように大会で意気軒昂たる様子で，政治的演技の任務を終えた。

4月 5日の天安門事件に関わる逃亡者を捜査中だった。溽溪のような小さな山奥まで異様な雰囲気が漂っていた。県の人民武装部の幹部たちはジープに乗って，人民公社にやってきて，民兵を組織し，不審者の捜査をはじめた。ここには他県（江西省以外）から出稼ぎに来ていた農民がおり，彼らは松脂を買い集め，木の板を切り，竹製品を作り，もっとも苦しく，疲れる仕事をしていた。やがて他県から出稼ぎに来ていた三人の農民が容疑者だとして県の人民武装部に捕らえられ，公社のビル前に連れて行かれた。人民武装部の幹部は彼らを厳しく尋問した。そのうちの若い二人は恐怖のあまり，黙って息を潜めていた。ただ，四十代の男性は自分は何の違法行為もしなかったことを少し弁明しただけなのに，この人民武装部の幹部の怒りを買ってしまった。幹部は三人を縄で縛り付け，トラックに連行するよう命じた。あの中年男性の両腕は首の後に捻られるようにきつく縛られたため，痛くて大声でわめいていた。トラックはくねくねとした山道に沿って，町に向かい，恐怖だけをこの山村に残した。法律，道義，秩序のないあの時代に，誰もこの三人の農民を待ち受けている運命を知るよしがなかった。

それから半年もたたないうちに，毛沢東が亡くなった。一か月後にまた毛沢東自らが擁護していた「四人組」が逮捕されたというニュースが飛び込んできた。続いて，「四人組」の罪状を摘発し，批判する運動がまたもや大々的に繰り

広げられた。今回も春の鄧小平批判と同じく，各部門は学習会を開き，スローガンを張り，すべての人は態度を明らかにし，憤慨することを強要させられた。閉鎖的な山の奥に住んでいる人々は，遠く北京の赤い壁（共産党トップたちの住居となる中南海を指す）内側で何が起こったのかなど知るはずもない。当然，北京人や上海人のように蟹（3匹の雄と1匹のメス。四人組を表す）のフルコースと大酒で騒ぐこともなかった。

ほとんどの一般人は新聞，放送と公文書が言っていることしか聞くことができない。これ以外の情報は一切分からない。上から伝達されたことは，猜疑心をもたず，絶対賛成しなければならない。そこで，どの為政者も公文書という形でもって，自分の絶対真理を押しつけるのである。指導者は誰であれ，如何なる政策を講じようと，一様に皆が口を揃えて賛成する光景が見られるのである。

1969年に劉少奇（りゅうしょうき）を倒すときには，党や全国民をあげての大批判だった。1972年の批林（林彪）、批孔（孔子）、批周公（周恩来）運動も人民大衆が奮い立ち，批判対象を攻撃した。1976年春の反右傾闘争も国をあげて糾弾し，その行動は迅速だった。今では，「四人組」の罪状を暴露し，人々はまるですべて「四人組」からの迫害を受けた被害者であり，また，「四人組」と戦った英雄になったかのようである。四川芸人の変面術（へいめん）[23]であっても，中国の政治舞台の変化の速さには遙かに及ばない。

13.　匿名の手紙がもたらした訃報

1977年 2月，僕の第一子婉雲（えんうん）が誕生した。撫州から１歳になったばかりの婉雲を連れてやっとのことで潯溪に帰ってくると，僕には山間部から異動したいという強烈な願いが生れていた。僕は教育局に異動願を提出し，期待しながら返事を待っていたが，結果は当てはずれだった。

さらにこの年の 4 月末，僕は阿敏(あびん)から手紙を受け取り，父親が 4 月 11 日に病気で亡くなったことを知った。彼女と阿和(僕の兄)は黒龍江に行き，父の葬儀をすませた。僕に子供が生れたばかりだったことを考え，僕には黒龍江に来るように連絡しなかった。僕は手紙を受け取ると呆然とした。父は間もなく釈放され，僕たちはすぐにでも会えるはずだった。どうしてこのように不幸なことがあるのだろう。こんなにも早くこの世から去ってしまうなんて。10 年前，母は父の刑期が間もなく満期になるというとき，再会という希望を叶えることなく死んでしまった。まさかその 10 年後，父ももうすぐ家族と会える，という希望を叶えることなく死んでしまうとは思いもよらなかった。僕は運命の神様がなぜこのように残酷なのか理解できない。

父が危篤の間，農場のリーダーは僕たち家族に知らせなかった。仲間の一人が見かねて， 3 月下旬になって阿敏に急を告げる匿名の手紙を送った。父が働いていた場所はとても寒く交通も不便であったので， 4 月 16 日にようやくこの手紙を受け取った。封筒の住所は父の働く農場だったがしかし，父の筆跡ではなかった。受取人として書かれているのは阿敏の幼名で，いつも父が手紙を書く時の呼び名ではなかった。阿敏は驚き不思議に思って心配になり，急いで手紙を開けると次のような数行の文字が書かれていた。「君の父親，朱沛人は脳卒中で病に伏し，起きられない。君が来ることができたら一番よい，今回会えなければおそらく一生会えないだろう。……」

この数日阿敏はずっと父が帰ってきて，親戚まわりをすることができる連絡を待ち望んでいた。父はかつて手紙を送ってきて，春になったら阿敏と北京で会い，一緒に南昌(なんしょう)の親戚を訪れようと約束していた。父が今，病に伏せっていて危篤であるなど思いもよらないことだった。この知らせは阿敏を驚かせたが，彼女はすぐさま東北に行くことを決め，もし父が動けるのであれば，北京に連れて行って治療させるつもりだった。向かう直前に阿敏は遠い江西の龍南にい

る１番上の弟阿和に電報を打ち，一緒に行く約束をした。

４月20日，阿敏は嫩江農場総場に着くと煉瓦を運ぶトラクターに乗り換えて父親の住む仕事場へ急いだ。トラクターはある十字路で止まり，阿敏を下ろすと左に曲がりまっすぐ歩けば着くと言った。道中，たくさんの労働者が道路を整備していて，荷物を下げて旅でへとへとになりながら辺りをきょろきょろ見回している彼女を見ていた。そのうちの一人が彼女に誰を探しているのか尋ねた。彼女が父親の朱沛人に会いに来たと言うと，その人はとても親切に彼女を分場事務室に連れて行ってくれた。そこで，事務室の役人が彼女に朱沛人は９日前すでに死んだという父親の訃報を伝えた。阿敏はふらふらになって椅子に座ると，やっとのことで必死に話し出した。「私の父が危篤になった時，あなた方はなぜ家族に知らせを送ったり，電報を打ったりしなかったのですか。私が早く来ることができたら父の最期を見届けられたのに」と。何人かの役人は互いに顔を見合わせ，その中の一人がとなりの人に言った。「知らせは送らなかったか。いや，送ったさ。」彼もあわてて，「そうだ，そうだ。送った，送った」と言った。そのとき阿敏は話を信じた。西安に戻ってから様々な場所を訪ねたが，嫩江農場から手紙は一通も届いてなかった。

事務室の警備員は阿敏に次のように言った。弟の阿和は彼女より１日先に到着していてさらに子供を連れて旅の疲れが出ていた。それに東北の寒さに順応できず子供は体調を崩してしまい，今は別の部屋で休んでいると。彼女はすぐに彼らに会いに行った。なんと阿和（あわ）は４歳の息子越山を連れてきたのだ。東北は春３月になってもまだ氷が張り，非常に寒いとは思いもよらなかったので，着ている服は少なく，手足は凍って冷たい。阿敏は急いで着ている防寒の上着を脱ぐとそれで越山をくるんだ。

警備員の案内で彼らは父親の住んでいた場所へ行った。そこは70〜80平米の大部屋で，一並びのオンドルがあった。オンドルには厳寒に耐えられない何人

かの老人が布団の中で横になっていた。彼らが入って来たのを見て，次から次へと頭を起こして成り行きを見ていた。父の形見はドアを入ってすぐの地面に積まれていた。たった一つの洗面器の中に数冊の毛沢東選集，手提げ袋は空だった。そばには長靴と腕時計。

警備員は彼らに言った。父親は農場での態度もとてもよく，みんなとの付き合いもよかったと。彼は博学で，いつもみんなに古今東西の典故を話して聞かせていた。他には国民党内部の腐敗したスキャンダルをたくさん暴露していた。さらに父親の病気が重くなってから，農場は彼一人に事務室のそばの部屋を用意して療養させ，二人の工員が彼を看病していたと。

ここの仲間が言うことには，父は早くから身体を壊していて，歩くときも足を引きずり，右手の親指は硬直して，物をつかむ時力が入らなかったそうだ。それが脳卒中の前触れだった。父が病気の間，たくさんの人が見舞ってくれた。世間話をしたり，薬を届けたりしてくれた。その時彼はすでに話をすることができなくなっていた。友達が子供たちに見舞いに来てもらおうかと聞くとただ黙って首を横に振った。子供たちを巻き添えにするのが怖かったのである。

匿名の手紙のことは誰も話すことができなかった。当時のあのような厳格な政治情勢の下では，人々はただ何も言わず行動するしか自己の愛憎を表現することができなかった。阿敏はずっと考えていた。父の容態が悪化した際に，勇気を持って手紙を書いてくれたあの無名の英雄は身分を明かして自分と会うことはできないが，すぐそばにいるのではないだろうか。阿敏はただ心の中でひっそりとこの心優しき人の平安を願うことしかできなかった。彼に好運が向いてきますように，と。

その晩阿敏は農場の労働者の李清栄の家に泊まるように手配された。李清栄は北京映画学院の学生で，言論が右派だとされ東北に送られた。彼と妻の結婚のいきさつは『牧馬人』[24]という映画のストーリーに酷似していた。妻は四川の

娘で家庭は貧しく，仲間たちと一緒に東北に来て働いていた。人の紹介を経て李清栄に嫁いだが，結婚した後にやっと彼が右派だと知った。

夜，彼女は阿敏と一緒に寝ながら話をしていた。彼女は自分が差別を受けていることから，子供の学校のことまで多くの悩みを抱えていた。阿敏は彼女に「旦那さんはあなたに良くしてくれるの」と尋ねた。彼女はうなずいたので，「彼があなたによくしてくれるのなら，間もなく平穏な日々が送れるようになるわ。今，「四人組」はすでに崩れ去ったし，これからの日々は日ごと一日よくなってゆくはずよ」と阿敏は彼女を励ました。阿敏の話は的中し，1978年李清栄は名誉回復し，妻と娘も家族みんなで北京へ帰った。

二日目，農場は阿敏と阿和を父の墓に連れて行った。農場の嫩江に物を運ぶトラックが彼女たちをついでに乗せてくれた。そこは人里離れた荒れ地で，父の新しい墓も目立たなかった。墓は長方形に土が盛られ，前には石碑はなく，ただ死者の姓名と生没年が書かれた板がささっていた。聞くところによるとこの墓は臨時に置かれるもので，すぐになくなるらしい。彼らは墓の前で頭を下げて礼をすると父に言った。孫の越山も会いに来た，と。続いて父の魂の眠る土を江西と西安に持って帰るために，墓から土を取った。父は寝ても覚めても願っていた，一度でいいから故郷に帰って親戚を訪ねたい，という憐れで果たせなかった無念な願いを叶えるために。

彼らは農場にいる間，父の墓の前でさえ，泣かなかった。すべての涙は強く押さえつけられていた。父の「反革命」というレッテルは剝がされたかもしれないが，それはただうわべだけのことだと誰もが知っていた。彼は依然として「反革命」として見られていて，ごくわずかな公民の権利もなかった。自分は『反革命』の家族だ。「文化大革命」の紅色の恐怖と「革命の独裁政治」の黒色の圧政がまだ取り除かれていない時，誰もがみんな感情を心の底に押し込めて，ただ何の表情もない泥でできた操り人形になるしかなかったのだ。

帰り道で基礎建設大隊の配置地区を通った。ここは父が労働したことがある場所で，運転手は車を止めて少し休憩を取った。車に一人近づいてきた。彼こそが父の同室の仲間で，かつて『文滙報』で編集をしていた，謝蔚明さんだった。みんな互いに一言二言挨拶をかわしていたが，誰も多くは語らなかった。

車が出発すると，阿敏も阿和も形容しがたい悲憤の情を抱きつつ，父が埋葬されている地を離れた。父親は一人ぼっちで北の氷と雪に覆われたこの土地に永遠に残されたのである。

14.　破られた大学への夢

父がこの世を去って間をおかずして，大学入試が再開されるという知らせが舞込んできた。しかも特別に「老三届」[25]の年齢より若くても知識青年であれば試験に参加できるというのである。大学は新入生募集試験制度を「文化大革命」によって既に十年も中断していたが，現在大学の門が思いがけなく大きく開かれ，数え切れないほどの青年たちの心に今一度希望の光を灯したのである。生まれたばかりの婉雲を抱えて，僕と水嬌は戸惑った。水嬌が子供を背負ったまま大学に通うということは土台無理な話であるし，僕は申し込むべきか，それともあきらめるべきか，そんな選択をせまられた。僕が働き始めてまだ5年たらずであり，これでは政策によって給料が打ち切られてしまう。そうなれば妻の月30元程度の収入では，どうやって生活を維持していくことができるだろうか。その上，婉雲はまだ泣くことしかできない赤子で，一時も離れることはできない。妻も仕事が忙しく，子供の面倒も見なければならないのにそんなことができるだろうか。水嬌は僕の最大の理解者であり，大局を見据えることのできる人だった。彼女は毅然と，行って千載一遇のチャンスを掴んで欲しい，どのような困難も私なら克服できる，と言ってくれた。僕は彼女のその言葉にひ

どく感動し，遂には自分の名を申し込みに行った。僕は自分の実力を知っていたので，実力勝負であるなら，自分が大学に合格できるということに何の問題もないと信じていた。それにもかかわらず，やはり借りてきた高等学校の数学の教科書をうず高く積んで，まんべんなく勉強した。なぜなら僕はすでにこの10年の間，高等学校の数学に触れていなかったからである。

大学入試の申し込みの責任を持つ人民公社事務室の主任は，僕たちの中学の校長でもあった。数日後，彼は県内で開かれた会議から帰ってくると，あわただしく僕を引きとめ「大学入試のことだが，君は条件から外れていてね，君の名が外されたんだよ」と言った。僕は大変訝しく思い，「どうしてそうなるんです。僕は北京第五中高等部を66年に卒業しました。まさか嘘をついているとでも言うのですか」と尋ねた。彼は「規定では下放された知識青年だけが出願できると書かれている。君は現在，もう下放された知識青年ではなく，人民公社の教師として働いているだろう。だから君には資格がないんだ」と説明した。そうだったのか。僕はそのような理由は思いもよらなかったが，何も言うことはできず，ただ心がいっぺんに空しさに覆われた。数日の間僕の心の中に芽生えていたささやかな夢と希望は，一瞬の内にきれいさっぱり洗い流されてしまったのである。

数年後僕はようやく知ったのだが，他の県や市にも僕と同じく仕事に就いていた知識青年はみな，大学受験に申し込む資格を得ており，僕のいた撫州師範の同学である鄒鎮などはあの時の大学入試に受かっていたのである。南城（なんじょう）県の教育局は僕のような山間部に分配された教師が去ってしまうことを恐れて，なんと中央の規定を自分の都合の良いように勝手に歪曲したのである。無情にも僕の受験資格は剝奪され，人生で数少ない運命を変えるチャンスは指の間からこぼれ落ちてしまい，一生かけても癒せない心の傷となった。どうりで中国には「県官不如現管（いくら偉くても実権を持つものにはかなわない）」という諺

があるはずだ。普通の庶民で官吏のひどい仕打ちを受けていない者はいないだろう。また「上に政策あれば，下に対策あり（上からの政策を下はかいくぐる）」という社会の現状に苦しめられていない人は果たして何人いるのだろうか。

15.　海の底に沈んだ希望

父がこの世を去って一年たたないうちに，鄧小平が改めて全国的な混乱を鎮めて正常化しようとする活動を早くも進めだした。父が黒竜江省労改農場で苦労を共にした仲間，謝蔚明などの人が1978年についに釈放された。同時に無実やでっち上げの罪を見直し改める活動も少しずつ行われてはきたが，依然として障害は多かった。謝蔚明はかつて北京市中級人民法院に名誉回復を訴える手紙を書いたが，受け取った返事は刑罰を与えたのは正しいというもので，その判決は据え置かれたままだった。謝蔚明は承服できず，続いて北京市高級人民法院に上訴したが，その後の進展は遅々としてなかった。

辺鄙な山間部にいるため，新聞に載る決まりきった内容以外，中央政府の政策に関するニュースは全く僕たちの知るところではなく，父の名誉回復についてなどさらに僕の考えの及ぶところではなかった。あの年の夏，僕の２番目の子供済が生まれた。新学期になると１歳半になる婉雲と生まれてまだ100日にもならない済を抱いて撫州から潯溪へ帰る時，僕たちは泣きたくても涙も出ないような状態だった。このような二人の幼子を連れて荷物も持ち，さらに歩いて山を登り，山脈を越えるということは，僕や妻であっても耐えられない。僕は水嬌と子供をホテルで休ませると，炎天下の中で，気が狂ったかのように街の大通りを走り回り，山に行く車を探した。「僕の妻は子供を生んだばかりで子供もとても小さいので，どうか僕たちに便宜をはかってください。」，「学校はすぐ新学期が始まるので，急いで帰って授業をしなければなりません。僕たちを助

けてください。」と出会う運転手に頼み込まなければいけなかった。自分がどんなに無能で，軟弱か，僕たちが生きて行くことはどんなに哀れで無力か，そのとき身にしみて分かった。

僕はまた教育局に異動願いを出した。僕たちよその土地のものが山中で仕事をするのはただ辛苦なだけであること，僕たちの実際の困難を考えて欲しいこと，そして適切な解決をして欲しいことを訴えた。そして僕はある提案をした。山間部の仕事を期限付きにすれば，働く人は希望ができ，異動のことばかりを考えて仕事に影響を与えることはなくなる。反対に一生山間部で働きたいという人には親身になって多くの便宜を図るべきだ，と。しかし，僕の異動願いはなしのつぶてで，依然として返事はなかった。

16.　父親の履歴

全国の何百万ものいわゆる右派分子を名誉回復するための作業は一進一退で，様々な障害にぶつかった。1979年になって，中央政府はようやくすべての右派のために名誉回復することを決めた。謝蔚明は直ちに上海にある元の職場『文滙報』に復職し，自分に関する右派問題を再調査するよう会社に要望した。新聞社は調査員を北京へ派遣し，市の公安局と裁判所で記録調書を調べた。同年10月に，新聞社は彼を右派にしたことは間違っていたと赤い紙に書いた壁新聞を張り出した。続いて，北京市中級人民裁判所は新聞社まで人を派遣し，鄭重に裁判所の新しい判決を言い渡した。「元の裁判内容を撤回し，原告は無罪である」と。短い１年の間に，同じ裁判所が同一人物同案件に対して，まったく違う雲泥の差のある判決を言い渡したのである。態度の変化の速さは信じられないものだった。

僕はこの閉鎖的な山奥にいながら，右派の名誉回復の動静を察知した。県は

右派として打倒された我々の学校の鄧先生のために名誉回復した。しかし，すべての物事の運びは水面下でこっそりと進めていた。赤い紙に書かれた壁新聞もなければ，この20年間以上冤罪を被っていた女性講師に謝罪と慰問もなかった。各機関の指導者はこれら名誉回復された右派に対して，共産党の慈悲と共産党組織が彼らに与えた配慮に感謝し，前向きに生きて行くようにと，強要した。鄧先生はもともと町の学校に勤務していたが，名誉回復してからも，彼女は町に戻ることを拒んだ。あと数か月で定年退職を迎える彼女は，定年の前にかつて自分の心を傷つけた元の学校に戻りたくなかったからである。

僕は父の右派問題を思い出した。父は何故右派にされたのか。名誉回復に該当するだろうか。右派の名誉回復に何か具体的な政策があるのか。これらすべては僕にとって早急に知りたいことだった。ちょうどこの時に，阿敏から手紙が来た。彼女が父は冤罪だと訴え出たことがわかった。我々子供たちは父の人生についてあまりにも知らなさすぎた。阿敏は父親の名誉を回復するために，父の解放前後の状況について一通り調査した。それで僕も父について初歩的な認識が得られた。

父朱沛人の本名は朱鐘騏（しゅちゅうき）であり，1915年に浙江省紹興（せっこうしょうしょうこう）に生まれた。祖父は詩文や書画に精通し，主に役人をしていたが，商業を営む時期もあった。長期にわたって南昌に拠点を置いていたため，南昌に定住した。後に失明し，寝たきりになり，暮らしは徐々に傾いていった。父は長男であり，幼少時代から文章の創作に長けていた。学生時代に新聞社に投稿し，原稿料で家計を助けていた。高校卒業後，家が貧しいため，学費の安い南京の中央政治大学を受験し，優秀な成績で合格した。最初は財経学部で学んでいた。家族は祖父の志を継承し，町の政府機関に就職することを望んでいた。ところが，官界の暗黒と社会の腐敗を目の当たりにした。彼は家に手紙を出し，祖父のように官界に浮き沈みすることはいやだと意志表示した。家の反対にもかかわらず，彼の意志は固

く，新聞学部に転学した。

当時は中央政治大学の学長は蔣介石であり，新聞学部の学部長は馬星野だった。馬星野は『中外月刊』を創刊していた。父は成績が非常に抜きんでており，馬星野に才能を買われ，たちまち『中外月刊』の主な編集者となった。彼は本誌に多くの記事を発表し，この時期から初めて沛人というペンネームを使うようになった。1937年に父は卒業したが，抗日戦争に際し，なかなか職が得られなかった。知り合いの紹介で江蘇省常熟の税務署でしばらく働いた。この後，人の推薦で江西寧都で『導報』の編集に携わった。一年も経たないうちに，また人の紹介で浙江省方岩で地方雑誌を編集していた。この後に，浙江省京華で『正報』の編集長を勤めた。

抗日戦争勝利後，馬星野は国民党の中央委員候補であり，国民党『中央日報』社の社長になった。新聞の編集業に協力してもらうために，彼は優秀な門下生を集めた。李荆蓀を総編集長に，父と陸鏗を副総編集長に任命した。これらの若者はいずれも30歳前後だった。風采も文才も今が盛りであり，理想に満ちており，新聞社に活力を与え，新聞は一時売れ行きが好調だった。1947年 7月29日，陸鏗は『中央日報』で孔祥熙，宋子文が政治権利を利用し，揚子公司と孚中公司を通じて，非合法な手段で国の外貨を買い入れて暴利を貪っているという行為を暴露した。この記事は国民党の上層部で大騒動を引き起こした。陸鏗の報道を李荆蓀と父が支持をしたため，陸鏗は取り調べられ，父も厳重注意を受けた。1948年に国民党は戦場において，次々と敗北し，孔祥熙，宋子文の横領行為を暴露した件を引き合いにだして，危機の局面を挽回する教訓としていた。父は国民党の腐敗と零落に憤りを感じ，同年 6月11日の『中央日報』の第一面を使って，陸鏗と連名で，『中央日報』を離脱するという大きな通告を出した。同時に国民党組織部に自らの意志で国民党を離脱する辞表を提出した。世論では大きな騒ぎとなった。この後，父は北平に赴き，『世界日報』の総編集長

を務める傍ら，燕京大学新聞学部の教授を兼任した。

1949年に平津戦役が勃発し，北平は包囲された。『世界日報』社の社長成舎我は家族を連れて海外に移住した。父の航空券もすでに用意され，直ちに香港に脱出するようにと蔣経国からの電報を受け取った。父は国民党にはもはや失望していた。『中央日報』の事件の教訓に鑑み，熟慮した上で，共産党について行くことを決め，毅然と北平に残った。

北平はまもなく解放された。このとき父はすでに無職で，ひどく差別を受けていた。職業安定所に行っても，名前の登録さえもさせてもらえず，幹部訓練班に応募しても拒否されてしまった。ある日，町を彷徨っていたとき，軍服の若者に声をかけられた。彼は燕京大学新聞学部で勉強した教え子であり，そのとき軍事管理委員会で幹部養成の仕事をしていた。父の苦境を知ると，補欠として幹部訓練班を紹介してくれた。しかし，他の人たちのようにすべて公費という訳にはいかず，就業後も軍とともに南下することも許されなかった。しかし，これはどうにかして得られた正式な身分であった。以後すべての新聞社は接収管理され，父は天津にある『進歩日報』の記者として配属され，天津に出向いた。

1951年に，全国で反革命分子を鎮圧する運動が展開され，父は天津市公安局に歴史反革命という罪名で二年半の保護観察処分を言い渡された。1954年に天津『進歩日報』は上海の『大公報』に合併され，業務は北京に移った。父も北京に行き，『大公報』の記者になり，商業欄の編集を担当した。この間に，彼は洪都というペンネームで，記事や翻訳を発表した。1957年に共産党は整風運動を始め，知識人に共産党の整風を手助けするよう，大鳴大放を要求した。父は相次いで三編の文章を書いて，新聞に掲載した。しばらくしてから，党内の整風は党外の反右派に変わった。運動の最初の頃，父は右派ではなかった。反右派運動の後期になると，新聞社は上からの右派指定ノルマが未達成のため，父

と譚という記者が右派にされた。父は災難から逃れられず，とうとう右派にされてしまった。過去の経歴も関連づけ，1958年に投獄され，しまいには獄死してしまったのだ。

17.　父のいた強制労働農場

父の仲間を通じて，父のいた黒竜江労改農場での状況をいささか知ることができた。

父は1965年，北京の通県から黒竜江へ身柄を移送された。北大荒(ほくだいこう)[26]では，彼らのような右派たちは穀物や野菜の苗を植え，草を刈り，木を伐採し，レンガを成型して窯で焼いてそれを運び出し，家畜に餌をやるといった，実にありとあらゆる仕事をさせられていた。夏の除草と秋の収穫時期の労働はもっとも大変で，しばしば夜が明ける前に起床し，朝は早く，夜は遅くまで精を出して働いており，広大な田畑に着くとようやく夜が明けてくるのである。また突然仕事が舞い込めば，いつも仕事は夜の8時，9時までかかっていた。父は典型的な文化人で，力仕事に従事しようにもとても不器用で，動作ものろのろとしており，どの労働ノルマも達成できず，できなかった仕事の後で数え切れないほど叱責され，懲罰を受けていた。そこで改めて父は人に湯を届けるというような，補助的な仕事をするよう命じられた。これを軽労働と言うけれども，しかし朝から晩まで湯を担いであちこち歩き回り続ければ，疲れてくたくたになってしまうだろう。時には他の仕事，小麦を刈り取り，それらを拾い集めて束ね，積み上げるといった仕事にも従事していたが，この仕事も腰や背を曲げて休みなく動かねばならなかった。軽い仕事だとはいっても，一日がかりで実際は全く軽い仕事ではなかったのである。農場には大量の野菜が植わっていたのに，ここに収容されていた人々の食事はいつも白菜の水煮ばかりで，たまに油で炒めた

ものを食べることができたら，みなとても満足していたらしい。農事の忙しい季節だけには肉の姿も見られ，食事はわずかに改善された。夜，彼らは大きな宿舎の中で眠るが，夜，点呼するために一列に寝床が並べられ，眠る時には頭を通路側に出すよう決められていた。どの部屋も数十人単位に割り振られて就寝するのだが，どの寝台も70cmにすぎない幅しかなく，常に人と人が肩が触れ合い，ぎっしり詰め込まれていた。そのため，宿舎に一歩でも入れば得体の知れない悪臭が漂ってきた。

「文化大革命」以前，農場の幹部たちはまだ人道を重視していた。冬の気温がマイナス20度を下回れば，引き続き収容者たちを仕事に配置させるようなことはなく，代わりに思想修正のための政治学習をしていた。ところが「文化大革命」が開始されて後，もともと農場にいた幹部たちは隅に追いやられ，造反派たちが前面に立つようになった。室外の気温がマイナス40度を下回ったとしても，彼ら革命左派たちはそのまま収容されている者たちに草刈や，木を切るなどの労働を強制したのである。父はこの農場において忍従の日々を過ごし，刑期が満了し仕事に就くことを待ち望んでいた。刑期が満了さえすれば新しい人生を獲得できると思っていたのだ。1968年，ついに耐え忍んだ刑期が満期になり，嫩江農場第九分場の仕事へと振り分けられた。毎月の給料を32.5元貰っていた。食堂で食事をしたり，協同組合（農場の売店）で買い物することができるという自由はあったが，ほとんどは拘束されたままであった。そのため農場では犯罪者を「大労改」といい，就業者たちを「二労改（にろうかい）」（強制労働は部分解除されるが，引き続き農場で改心教育を受ける者）と呼んだ。知識階級に対する敵視と恐れからだろうか，労農出身の管理教育担当の幹部は，知識階級出身の政治犯たちを人格の無い不愉快なものとし，甚だしい災禍であるとすら見なした。そこで彼らを痛めつけて虐待を加えたが，その手段は時として非常に残忍なものであった。

父のいた第九分場には王という仲間がいた。彼は天津北洋大学を卒業し，父と同じく右派の一員と見なされ十年の刑を下された後，刑期満了を迎えこの農場に就業したのだった。1971年，彼は身内を訪ねるための許可を得て 9月に帰った後，『参考消息』[27]を持ち帰り農場で回覧した。結果として彼は批判闘争に遇い，無残にも打ち殺されてしまったのだが，当時農場は彼の家族に対して，彼は自分の罪を恐れて自殺した，と説明していた。さらにもう一人，同じく迫害を受けた仲間に清華（せいか）大学外国語学部を卒業した者がいたが，刑期満了後に打石山へ就業した。彼には年老いた母親が北京にいたため，それまで何度も家に帰り身内に会うための休暇を申請していたが，いつまでたっても承認されなかった。それから彼は別れを告げることなく逃げ出したが，その途中に捕らえられ，管理教育担当の幹部に棍棒で無残にも打ち殺されたのだった。「文化大革命」の収束後，このような暴力を振るった殺人犯に科せられたのは，わずかに７年の懲役だけだったそうだ。

労改農場に就業する人員の異動は頻繁に行われた。父も相次いで場内の直属隊や老虎溝（村名）などでの仕事へ異動になった。1975年，また異動があって嫩江県城職工医院（どんこうけんじょう）の託児所でオンドルを焚く仕事に就いた。そこで働いていたときは，彼にとって自由な日々を過ごすことができた。彼は日中，天秤で水を運びオンドルを焚き，暗くなれば子供たちを父母のもとへと帰し，二間部屋のオンドルの上に布団を引けばもう居るのは彼一人であって，もう他に何もすることは無かったのである。彼はトランジスターを買い，この拘束されることのまったくない時間にラジオを聴いていた。

ある日，一人の労改農場の労働者が仕事中に怪我をしたため，この職工医院に運ばれ治療を受けにきていた。そのとき，謝蔚明がつきそいとして派遣されていたのである。謝蔚明は父と同じく報道機関に勤めていた古い友人で，彼もまた「二労改」であった。彼はこの機会を利用し，毎晩託児所までやってきて

は父の所で眠ったり，ラジオを聴いたり，昔のことやとりとめもないこと，くだらないことを話し合った。以前彼もまた同じように一間の宿舎に住んでいたのだが，犯罪者の寝台の中で眠るにも，人が多ければ秘密は守られないし，おいそれと近づくことができなかった。この二人の古い友人は言いたいことを思う存分に語り合い，それはいつも深夜にまで及んだ。「文化大革命」について語り合ったとき，父は短い言葉でずばりと要所を指摘した。私たちは今監獄の中にいて自由に話すことはできないが，現在の中国はまるごと大きな監獄である，と。そして自分たちの未来を語り合ったとき父は決して楽観視しておらず，彼はよくこの農場で人生を終えるだろうという心の準備をしていた。けれどもたった一つの願いとして，お金を貯めて，休みをもらいここを出て子供たちに会いに行きたいという希望を持っているだけだ，とこぼしていたらしい。1976年，中央政府の政策が，彼の被っていた反革命分子としてのレッテルを剝がしたため，彼は生活に対して再び希望に満ち溢れた。彼は中央の様々な政策がより一層具体化され，新たに職業を得られることを待ち望んでいた。しかしまる一年経っても彼のどんな願いも叶うことはなく，想い焦がれる肉親への訪問すらも許可されなかった。最後に痩せ衰えた体は持ちこたえることができず，夜明けの光が間もなく昇ろうとしたその時に，ついに恨みを呑んでこの世を去ってしまったのである。

18.　右派言論・その一――『なぜ適当にごまかすのか』――

父親は新聞に3篇の短文を発表していた。いずれもペンネームは洪都で，批判を受けるときは「洪都傑作」と嘲りを受けた。制裁を受けて，その短文で彼が右派と言い渡された証拠となった。都合のいいことに文はみな長くない。ここに写し取ってみよう。

第一の文章は1957年 5月15日『大公報』第三面に発表した。題目は『なぜ適当にごまかすのか』だ。

——ここ何年か私はしだいに「党員幹部が怖い」という感情が生じ，それはだんだんひどくなってきた。

——まず 8年以上前のことから話そう。北平解放以後，私の仕事場が接収管理され，ある軍事管理委員会の代表がやって来た。この人は一般群集の中に溶け込む事に長けていて，いつも（私を含む）前からいた職員と世間話をした。何でも全て話し，威張った態度もなかった。さらに私個人（もちろん私個人にとどまらず）の仕事の世話までとても力を尽くしてくれた。たったこのことだけで，旧社会出身の私に今まで味わったことのないような新鮮な雰囲気を感じさせ，心の中で秘かに敬い慕い，共産党は確かにすばらしい，と思わせた。

——おととし，私はまたあの人に会った。彼はその時さらに出世していた。私は近寄って彼に親しく挨拶をしたが，彼は気のない様子でうなずいた。私は彼がすでに私のことを忘れているのだと思い，急いで名乗った。彼は「分かっている。元気かい」と言うと適当にごまかし，すぐ向きを変えるとさっさと行ってしまった。私はすっかり興ざめしてしまい，気まずくとぼとぼとその場から離れた。この適当にごまかすという幹部の態度をここ何年も経験してきたので，別に不思議に思わなかった。この後私はもう決してこのような挨拶をしたことを後悔していた。私の心の中に長く存在していた一人の親しみやすく，よく友人を気にかけていた共産党員のイメージは壊れてしまったからである。

——ここ何年か仕事の関係で何人かの指導者や幹部と接することが多かった。その間，楽しく，親密な感情を持つことは難しかった。私はいつも次のような返答を返されていた。「私は今忙しいのだ。君，別の人とこのこ

とについて話してくれないか。」「うむ。×秘書と連絡を取りたまえ。」公務でさえこのようなのだから，私事はもっと口に出せない。私事について話すつもりすらないのだから，腹を割った話などは到底考えられなかった。

――この時から私は自分自身に戒律を定めた。自分の職場であろうと外であろうと関係ない，幹部であれば私は接触を避ける，と。

――この戒律を定めてから，余計な腹立ちが少なくなった。しかし，少し副作用はあった。それはある会議で「積極的に指導者に接触をしない」と批判されたり，「落後者」の証拠の一つになったことだ。

―― 8年前，共産党に対して何も知らない一人の旧知識分子として指導者の立場にある共産党員と接近し，ある時は深夜まで話していたこともあった。けれども，革命の仕事に従事して何年かすると幹部に会うとかえって恐れるようになった。これは私のせいなのか。それとも「幹部」のせいなのか。整風運動の間，お互いに自己反省するべきではないだろうか。

この文章には一人の知識分子がある指導者，幹部の前で冷たくされたり，無視されたりしたという幹部に対する不満が書かれている。ここから党員幹部の役人気取りを批判した。これを書いた動機はただ党と大衆の関係を改善し，共産党幹部の親しみやすく民衆に溶け込むというよい伝統を取り戻せるよう希望しただけだった。このような話を二，三言しただけで，最後には罪を言い渡されるのである。僕が中学に入学して目にした新聞のどこを見ても，鶯がさえずり燕が舞うような美しい記事ばかりで，それこそが偉大であり，栄誉であり，正しかったのだ。それから20年の間，共産党の時流に逆行する行為について，大多数の中国人はみなもはやひたすら沈黙することに慣れきっていた。たとえ3年に及ぶ自然災害によって，餓死する民衆が何千万人に上っても，どの新聞も少しもニュースを漏らさず，「NO」という字を一文字書くことさえできな

い。この悲惨な教訓は中華民族に大きな課題を背負わせることになった。

19.　右派言論・その二――『政治と実務』――

第二編は1957年5月24日の『大公報』の第二面に掲載された。タイトルは『政治と実務』である。内容は以下の通りである。

二年前に新聞でこのような記事を読んだことがある。長年落後者だと思われていた労働者が生産ノルマを誰よりも立派に達成することができるということがあるときに分かった。また，長年落後者だと思われて，共産主義青年団に受け入れられなかった青年は重要な発明をしたことがあると分かった。これは何とも深く考えさせられることだろう！　しかし，我々の指導者，思想教育者，新聞記者はこれをただ個別の事例として偶発的な「奇跡」としか見なかった。そのために，一葉落ちて秋を知るようには，ことの予測や重要な問題を見いだすことはできなかった。

何が問題なのだろうか。つまりそれは政治と実務の関係を如何に正しく理解するかということである。この数年来，政治に対して，このような見方がある。積極的に会議に参加しなかったり，招集しなかったり，会議であまり発言をしない，または発言しても意気揚揚としていないとか，ことあるたびに幹部に頻繁に報告しない，幹部の呼びかけに挙手して賛成せず，幹部を喜ばせる発言をしない人は「政治的落後者」と見なされている。政治とは何か。このままでは会議，発言，挙手，報告，きれい事を言うということが政治のようである。このような「政治的進歩者」たちは果たして実務において能力があるのか，勤勉誠実に仕事をやっているのかどうか，などの要素はまったく考えられていないようである。ここでの政治はまる

で社会的な基礎であり，実務は（言っておくが，いわゆる実務というものには生産，技術，科学が含まれる）上部構造のようである。実務が政治に適応し，政治は実務に適応しないことを要求している。

こうして，ある人が仕事において業績をあげていることを知られてしまえば，ただちに仕事の現場である研究室または工場，畑，店頭から会議場のような政治舞台に移動させる。そうなればこの人たちは表に出ざるを得ない。でなければ，「政治から逃げている」とレッテルを貼られる。そのうちにこのやり方は当たり前のようになった。これら仕事において業績をあげた人々もまた，自分らを政治の表舞台に祭り上げてくれなければおそらく満足しないだろう。このような現象に対して批判意見もあったけれど，何故かなかなか改めることができなかった。それは「すべてのものは低俗であり，ただ政治だけが尊い」，「幹部はいたるところにいるが，苦悩するのは真面目に仕事をし，学問に没頭をしているものだけだ」というところに原因がある。歪んだ気風はついにここまでに至った。何と嘆げかわしく，恐ろしいことだろう。

新聞で私の尊敬している労働模範者，先進的な労働者，学者の名前はよく耳にする。しかし，その報道のほとんどは彼らが仕事においてあげた業績ではなく，どこそこでどんな会議に参加し，どんな発言をし，そして，昇進するといったようなことばかりであった。我々の国家と人民は彼らに会議に出させ，政治的な発言を求めているのか，それとも仕事や研究領域で大きな業績をあげることを求めているのか，このことに対して私は常々憂慮の念を禁じ得ない。彼らを会議に多く出さず，そしてあまり発言させないことは国家にとっては，何ら損害をもたらすことではない。しかし，反対に，彼らの仕事に支障をきたすようなことがあれば，歴史は我々世代の愚かさと無知を永遠に責めるだろう。

私は業績のある人がどんな政治活動に従事しても一概に反対することは決してない。それに，一人の国民として，政治活動に参加する権利と義務があると思う。しかし，政治活動を奨励したり，政治の肩書きを栄誉に思ったりしないほうが良い。それは単なる社会生活の一部分にすぎない。故に，ある分野において業績のある人は政治活動への参加をできる限り控えるべきだと思う。彼らをプロの政治家と同等にさせ，正業に就かせない，従事できないようにすべきではない。それと同時に社会に政治活動にほとんど，またはまったく参加する機会が得られない人がいる。彼らはこのような機会が得られることを望んでいる。これは当然の要望である。どの人も政治活動に参加できるようにあらゆる手段を講じるべきである。民主主義を活発にし，普及させれば，政治は日常生活に不可欠な一部分となり，特殊で神秘的なものではなくなるのである。そうすれば，国家の政治は豊かで，健全になり，我々の事業も発展するだろう。

卓越した職業政治家は人民に尊敬される。卓越した労働者，農民，芸術家，教師，学者なども同じく人民に尊敬される。どの職業にも出世する人はいる。出世する人は必ずしも政治の肩書きが必要とは限らない。

この文章は一つ重要な問題を提起した。すなわち社会生活の政治化である。すべてが政治と関連づけられ，政治の範疇に帰属させられる。これによって，人の価値や社会的地位が認められる。このような風習は後々，人を評価するときに仕事の業績を見ず，政治活動を見るようになり，業績の善し悪しを問わず，指導者に対して従順であるかどうかにまで発展した。しまいには，幹部に迎合し，媚びを売り，ほらを吹いたり，おべっかを使ったりする結果を招いてしまった。同時に，官僚本意の思想も社会全体に氾濫するようになった。役人にでもなれば身分と地位それにあらゆる利益が得られる。結果的に中国人は機会と

条件さえあれば，如何に肩書きを獲得するかということを必ず考える。役人のポストをめぐって争ったり，奪い合ったり，売買したり，様々な手段を使い，ますます熾烈を極める。たとえ和尚でも科長クラスと所長クラスに分けられることがある。これはもはやブラックユーモアではなく，正真正銘の中国的特色になっているのである。もう一方で，仕事において素晴らしい業績をあげている人たちが相次いで官界に引っ張り込まれ，多くの人は官界の凡庸者となり，自分の本職や特技はおろそかにされ，人民の事業は損失を蒙ることになる。これはまた人に痛惜の念を抱かさずにはいられない。新中国が成立したばかりの五十年代の初めにこれらの事象はまだほんの少しの兆しとして現れた段階で，父に鋭く洞察されてしまい，彼は隠すこともなく天下に公表した。この短文は社会の歪みを射た嚆矢と言えよう。不幸なことに，これはまた父の首かせとなって，父は20年近く受難し，無実の罪を受けることとなった。

20.　右派言論・その三――『党性と宗派性』――

第三篇目の文章は1957年 5月25日の『大公報』の三版に『党性[28]と宗派性』というタイトルで発表された。

――ある人は言う。百家争鳴とは言っても，共産党員の意見はもっとも少なく，公開発表される意見はさらに少ない，と。ある共産党員の話では，現在は主に党外の意見を取り入れることで党内に風を通す時期であり，そのため党員は一時的に意見を控えていると述べている。確かに道理が通っているかのように見えるが，実は100％そうだとは言えないだろう。これまで，共産党組織や党の指導者を批判するときには，群集は党員の意見を聞くことができなかった。中国共産党中央統戦部で召集された会議の座談会上で民革（中国国民党革命委員会のこと。民主党派の一つ・訳者注）の王

昆侖は，人民代表大会常務委員会で国家の大事を討論するとき，いつも民主党派の党員が発言するだけで，共産党員は多数いるのに発言しない，と語っている。以上から分かるように，共産党員は群衆の中でも少ししか発言せず，それは昔も今も少しも変わらないのである。

――ある人はこれが共産党員の党性の現れだと言っていた。私は共産党員ではないから，党規約を調査しマルクスレーニン主義の書物からこの問題に関する解釈を行うつもりはない。私は共産党を愛護する一個人の角度から党員の党性の認識に対して語っていきたいと思う。

――私の理解では党性とは，マルクスレーニン主義の立場を主張し，プロレタリア階級の利益をあくまで主張し，人民大衆の利益を主張することである。共産党員ならこれ以外はどんなものであっても，党性と呼ぶことはできないはずである。これこそが大衆が求めている共産党員の党性であろう。

――共産党は正しいのである。だが，党組織の一つ一つ，党指導者幹部，党員一人一人の一挙手一投足のすべてが正確であるとは限らないのである。ある党組織あるいは党員にも過失や過ちがあり，共産党組織や共産党同志のやり方や処理の仕方がプロレタリア階級と人民の利益と一致しなかったとき，党員たちは当該する組織や個人へ批判を展開すべきであるが，ほぼそのような論争はなされていない。問題は群衆が過ちをおかした党組織や個人への批判を行うとき，党員は党組織や個人の利益を守るのだろうか。それとも，群衆と同じ立場に立って群衆の正しい意見をを支持し，群衆と共に誤った闘争を行うというのだろうか。私のような共産党員ではない多くの人間から見れば，一党員がもし後者の態度を取るならば，それこそが真の党性なのである。私は党は党員のこのような行為を許し支持するべきであると思う。

――またある人は党員のこのような行いは党内が不一致であるかのような印象を与え，よくない影響が出てしまい，党員はできるだけ党内についての批評を行い，党外の群衆と共に党組織や同志への批評を行う必要はないと言うかもしれない。しかし私の考え方はこれとは異なる。共産党員は群衆と密接に関わるべきであり，指導者たちは群衆のために党の活動として闘争するというものである。群衆が過ちを犯したときには群衆に教育をせねばならないが，群衆が正しいときは群衆を支持せねばならない。群衆が党員のこのような行為を見れば，群衆はさらに党を擁護し，心から愛するだろう。これは悪い影響を与えるどころか，とても良いことなのである。党内の正しい意見と間違った意見は一致しないはずであり，群衆はこの種の不一致によって党に対する信任を弱めるということはないだろう。それとは逆に，群衆は間違った意見に対しても党内が一致しているのを見たときには，大いに憤るだろう。

――もしこのような態度をとるならば，すなわち党組織あるいは個々の党員同志には錯誤や欠点があるにもかかわらず，自分が党員であるため，その組織や個人を擁護せざるをえない。これではもはや党性と呼ぶことはできず，ただ宗派性と見なすほかはないだろう。このような時，党にとっては，もはや是非の境界線はなくなってしまっている。または曖昧になってしまっており，群衆にも宗派性という印象を与えるだろう。最近，『大公報』に掲載された中央手工業管理局と中央美術工芸学院の党組織の問題について言えば，党員は，このような宗派性を持つべきであると要求したとわかる。

――党員の宗派性はたんに善悪の判断から現れるばかりでなく他の事柄からも顕著に出ている。例えば党外の人士から，自意識過剰などとして最近の新聞に摘発されることがとても多いように思われる。群衆が摘発した党

員に対する意見を見れば，これら党員の党性がとても強いどころか，彼らの党性がとても貧弱で，宗派性のみで党性はまったくないと言ってよいことがわかる。宗派性の危害については概ね推して知るべきことであるだろう。

上記の文章には理想主義の色彩が色濃く出ていることは明らかであろう。古今東西を通じて，あらゆる国家，あらゆる団体には自分なりの利益があるはずである。組織の内外に区別があるのは当然のことだろう。共産党組織の鉄の規律は逸脱を許さず，ただときたま政策が緩くなったり，厳しくなったりするだけである。差し障りがなければ，小さな意見を述べても，群衆と噂話をしても許される。しかし，党の内部において，個人崇拝をする間違ったやり方に対して，たとえ党の内部であっても，不満は密かに独り言をもらすしかない。身の程をわきまえなければ，彭徳懐（粛正された共産党高官•訳者注）や張志新（処刑された政見を異にする共産党員・訳者注）のようになってしまうだろう。しかし，建国初期に当たる50年代に，共産党の呼びかけに共鳴した党外の一介の知識人が党内の複雑な事情など，どうして理解することができただろうか。父のこの文章に一種の現実離れした願望が現れているとしても，不思議ではないだろう。悲しいかな，父の党に対する熱烈なまでの強い希望をこめた批判は，こともあろうに党に対する悪辣な攻撃と見なされ，彼の他にも300万人あまりの人々が右派分子とされたのである。ただ意外にも共産党の各階級の組織がかつてない強い党性を現すことになった知識人への対処方法については，父には思いもよらなかっただろう。

21.　奔走し訴え続けた一年

父の無実の罪を名誉回復するために，とても大きな困難に遭遇した。それは

父が捕まった時に働いていた『大公報』新聞社はすでになくなっていて，父の事件を処理する人が誰もいなくなっていたからだ。これは一体どうしたらいいのだろう。

1979年 2月，一番上の姉阿敏は中央統戦部に手紙を出し，父の無実の罪に関する状況を訴え，名誉回復はどの機関でできるか尋ねた。数か月後手紙の返事を受け取った。そこには『大公報』新聞社はすでになくなっているが，そこで働いていた人員のほとんどは『財貿戦線』新聞社に入ったので，そこに直接行って解決したらよいと書かれていた。 8月，姉は特別に休暇をとり，西安から北京の『財貿戦線』新聞社に行き，父の事件をもう一度調査してくれるように頼むことにした。思いがけないことに，新聞社の受付はこのように言った。「朱沛人の資料はこの新聞社にはない。当時朱沛人の過失は文化部の批判になったからで，新聞社には朱沛人の档案を調べる権利はないから，再調査を進める方法はないのだ」と。

どうやら文化部に行くしかなく，二日目彼女は文化部まで行った。そこに来ている問題解決を訴える人の数は新聞社よりも多く，待っている人は龍のように長く，列の後ろは例によって先に用紙に自分の姓名，職場とここに来た理由を書いて提出し，さらに呼び出しを待つのである。やっとのことで面会できたものの，彼女が父の件のいきさつを説明していると，話が終わらないうちに，受付の係りに打ち切られて，「文化部は今まで新聞社の運動には介入したことがなく，新聞社の問題は中宣部が管理することになっている」と，言われた。

そこでまた最初から２日前の新聞社と文化部と同じように，また何時間も並んで待ったところ，またしても同じように，一言二言で彼女を追い払おうとした。――受付が言うには，「中宣部が把握しているのは全国の宣伝方面の政治方針で，あなたのお父さんの事件は北京市が手続きしたものです。具体的な問題は北京市共産党委員会へお願いします」ということだった。どうしようもなく，

彼女はまた北京市共産党委員会に行くしかなかった。北京市共産党委員会の答えは,「その件は裁判所が判決を出したので，名誉回復も判決を出した北京市中級人民裁判所に行くべきだ」というものだった。そこでさらに北京市中級人民裁判所に行くと，この問題は国務院の受付に行くべきだと言われた。今度は国務院の受付に行くと，この事は『財貿戦線』新聞社に行くよう言われた。

彼女は泣くに泣けず，笑うに笑えず，ゴムまりを何日か蹴っていたら思いがけず最後にまた元の場所に戻ってきてしまったような気持ちだった。午の刻（午前11時から午後１時）近くに国務院の受付から出てきた彼女の身心は疲労困憊し，何もしたくなくなっていた。何日か奔走し，苦労し，いらだちながら並んで待たされて，希望を訴えたけれども，最後はやはり何も得ることができず，父の無実の罪の再調査は依然として見通しが立っていなかった。唯一喜びに値することと言えば，自分が北京にいる時は夫の実家に泊まれるため，食事と宿泊の心配がいらないことだった。街ではさらに何百，何千もの田舎から北京に訴えに来た人が宿に泊まることもできず，いたるところにビニールの布を縄で引っ張り臨時の屋根にして一家はその下に泊まっていた。苦しみながら待った訴えには明確な結果が出たのだろうが，このような人々は破れてぼろぼろになったシャツを着ており，野宿をしているため，いかにも辛そうだった。彼らに比べると自分はまだ幸福な方であろうと思わずにはいられなかった。

1979年から1980年は阿敏一人で父の無実の罪をあちこちに訴えた一年だった。この一年で彼女は西安と北京の間を行ったり来たりして，直接会ったり，手紙のやり取りをして名誉回復を訴えたが，何の結果も得られなかった。『財貿戦線』新聞社は，「『大公報』社の元社員はいるが彼らはただ仕事の関係で異動してきたにすぎず，私たちはそもそも『大公報』社ではないので，『大公報』社が残した問題を処理することはできない。また政策にそって言えば，元の職場がなくなっていたら，その上級機関を訪ねるべきで『大公報』の上級機関は文化部で

ある」と述べた。さらに文化部の返答は，「私たちは現在何の上級機関でもなく，『財貿戦線』新聞社はすでに大公報の右派問題の一部を再調査しているので，彼らが解決してくれるだろう」というものだった。そしてもし，問題が解決されなかったら国務院の受付に行くように，というものだった。国務院の受付は「私たちは政策性の問題しか解決しないので，具体的な問題は具体的な機関に行って解決する必要がある」と言った。となると，具体的な機関というのは一体どこになるのだろう。やはり結果は出ない。以後，阿敏はまた裁判所へ行き，父の名誉回復を訴えたが，ずっと返事はなかった。

22.　困難に満ちた名誉回復への路

現状が綴られた阿敏からの手紙を受け取った後，1980年の初め，僕は 3通の手紙を立て続けに出した。一通目は統一戦線部に宛てたもので，姉の阿敏が朱沛人の冤罪を名誉回復するために方々に奔走しているのにもかかわらず，一向に結果が出ないので，今一度どこかの部門で審議されるべきであるのかを尋ねた。二通目は『財貿戦線』新聞社宛で，朱沛人についての記録を再調査するよう懇請したものである。そして三通目は北京市にある高等裁判所に宛てたものであり，父の冤罪についての申し立てについて，審議し，併せて回答してもらえるよう要求した。僕はまた別々に三通の手紙を出して，その結果を尋ねた。

『財貿戦線』新聞社からはすぐに返事が来た。それによると『大公報』社はすでになく，『大公報』社の未処理の案件を我々に持ってこられても困る，ということだった。同時に裁判所からも回答があったが，朱沛人のことを双方で解決することは当然のことであるが，先に右派の問題を明らかにし，右派のことについて審議した結果を裁判所に引渡した後，裁判所でようやく審議され刑罰を下す判決をすることができるのだ，としていた。

このことを知って私はあっけにとられた。父の長い間晴らせなかった冤罪をようやく晴らせると思い，このような行動をとったが，裁判所がこの案件を受理しない上に，新聞社すらも受け入れてはくれない。僕たちが現在，道なき路を歩んでいるのは明らかだった。僕はもう一度直ちに『財貿戦線』新聞社に手紙を送った。「もともと『大公報』社では25名が右派とされ，その内23名がすでに名誉回復政策が実行されており，その中でも多くの人が貴社によって解決されています。『大公報』社はもはや無くなってしまっていますが，あなた方は間違いなく唯一の発言権を持った機関なのです。かつて朱沛人と共に働いていた多くの人たちは，いまだにここで働いているのではないでしょうか。この状況の下で，私たちは何度もあなた方に尋ねましたが，このことは人情や道理で対応すべきことではないでしょうか。けれどもまる一年余りが経っても，未だ責任はたらい回しにされ宙に浮いたままで，私たちは今なおごくわずかの結果すらも得られてはおらず，この心は何と言い現せばよいのでしょうか。」僕は続けてこのように記した。「しかし私は今なお，あなた方に希望を抱いています。私はもう一度，丁寧にあなた方に呼びかけたい。朱沛人のために右派についての一件の再調査をして下さい。この仕事を完成させることで唯一つの資格と能力を持つものとなるでしょう。」しかしこの手紙を送った後，何の音沙汰も無くなった。

同時にまた僕は統一戦線部へ一通の手紙を出し，まずは前回の手紙が届いていないかをたずね，次に彼らに朱沛人の件について裁判所と新聞社のどちらにも受理されなかったことを告げ，そして私たちはどのようにすべきかをたずねた。なしのつぶてだった。

万事どうにもならない状況下で，6月にまた僕は『人民日報』の編集部宛に手紙を書き，あらゆる苦悩を彼らに向けてぶっつけ，併せてこの問題をどのように解決すべきか，教えを請うた。『人民日報』社は僕の手紙を中共江西省委員

会へと渡した。 9月になり，中共江西省委員会事務局から僕に手紙が届いた。そこにはこう書かれてあった。「あなたの父朱沛人の右派問題についてですが，中央五部[29]名誉回復事務局はすでに『財貿戦線』新聞社が再調査を行うことを確定しています。ただちに当該の新聞社に連絡しなさい」と。この手紙を受け取り，私はとても喜んだ。問題がこれで解決されるはずだと思ったからだ。僕は『財貿戦線』新聞社に対して，まずこの案件について引き受けてくれたことに感謝を表し，そしてまた再調査の状況はどうか，家族は処理のためにどのような手続きが必要か，ということを記した一通の手紙を送った。けれども回答は何もなかった。

この期間，阿敏もまた引き続き各所へ手紙を送り，さらに出張の機会を利用して再び『財貿戦線』新聞社を訪ね，再調査の結果を聞いた。『財貿戦線』新聞社で対応した社員は，朱沛人の一件について，まったく彼らには再調査の責任はなく，自分たちにできるのはただこの問題をいくつか明らかにするために間接的な証拠材料を提供できるだけにすぎないと告げた。つまり言い換えれば，朱沛人の右派に関する名誉回復の問題再審査に関して彼らは，依然として引き受けてはおらず，もし引き受ける機関が現れれば，『財貿戦線』新聞社はいくつかの問題を明らかにするための情報提供ができる，ということだけなのである。『財貿戦線』新聞社がとったこのような態度は僕たちをおおいに失望させた。現在もこのことを引き受けてくれる機関はないのに，『財貿戦線』新聞社は誰に朱沛人のいくつかの問題について情報提供をするつもりなのだろうか。

僕はこのことについて，ようやく自分があまりにも未熟であったことを知った。そして僕はまた国務院五部摘帽事務局へ手紙を送り，この状況を報告する以外に方法がなかった。

1980年に全国にいた大多数の右派とされた人たちはみな名誉回復をしたが，僕たちがここ数年間続けた努力でも，ごくわずかな結果すらも得られなかった。

僕たちの心の内には，ぬぐい去れない暗い影がますます色濃く，沈殿物のように積もっていった。僕たちは父のためにため息をついた。彼は「四人組」が打倒された後も生きていた。この時全国は混乱を鎮め正常化する前であったが，希望の光が照らされ始めた頃であった。そんな父の心の中は新生活への希望に満ち溢れていたのに，労改農場で一人寂しくこの世を離れたのである。これはどんなにか悲しいことであろうか。父がもしもまだ生きていたなら，彼の名誉回復はこのような状況であったのだろうか。

23.　北京へ陳情に行く

1981年に僕は再び統戦部（とうせんぶ）に手紙を出した。僕は手紙では「我々は父の冤罪のために2年間も奔走し，訴えてきました。なのに，（結果は）今日に至っても杳として消息がありません。正直に申しまして，これはいったい何故なのか理解できません。たとえ一審の判決を維持するにしても，はっきりした結果を出すべきではないでしょうか」と書き，続いて愚痴をこぼした。「朱沛人の小さな冤罪のために我々は前後2年間もの時間を費やしました。訴状は中央政府の国務院，統戦部まで提出しました。これらはいずれも中央の機関ではないでしょうか。しかし，今日になっても誰一人正義を擁護する者がいない。誰一人公平を主張する者がいない。この案件はいつになれば解決できるかわかりません。事件を処理する職員は共産党の威信，人民大衆の苦しみ，国を安定させ国民を団結させる，という国家の方針をいったいどう思っているかも分かりません。これはけっして大げさなことではなく，心の憤懣を露わにしただけです。どうしても言わざるを得ません。」最後に，「我々は誰に訴えれば良いのでしょうか。中央書記処または政治局でしょうか。我々はいったいどうすれば良いのでしょうか」と強い調子で問い詰めた。

愚痴は所詮愚痴である。一介の庶民は地位もなく，発言も重んぜられない。愚痴をこぼしてもたかが知れている。阿敏は父の冤罪のことで焦慮している。僕であっても同じ気持ちだ。しかし，僕たちはいずれも北京で仕事をしていない。阿敏はまた何回か関係部門を訪ねたが，僕の方はただ書簡をもって，訴えていただけだった。北京に行くのは容易なことではない。僕たちのような月給3，40元しかもらっていない者にとっては，北京に出向くことは大きな経済負担である。だが，ここまで来ると僕はやはり行かざるをえないと思った。1981年 7月12日から学校の夏休みを利用して，僕ははるばる北京にやって来たのだ。

『財貿戦線』新聞社の受付は僕の来意を聞くと，この案件を受け持っている女性幹部の馬玉如（ばぎょくじょ）のところに行くようにと言ってくれた。馬はちょうど会議中だったので，2日後にやっと会えた。彼女は「あなたの父親の右派問題は 6月にすでに改められ，関連資料は裁判所に郵送しました。再審査の結果はあちらで調べて下さい」と言った後，厳しい表情をしながら話を続けた。「あなたの父親は解放前に大きな問題があり，共産党と敵対していました。1957年に3編の文書を発表しましたね。ほかにも書いたようで，発表していなかったけれど，言葉遣いは激しく，尋常ではありませんでした。以前にも重大問題をもたらすような言論をまき散らしまし。今回はあなたたち兄弟の将来を考えての名誉回復なのです」と。また「朱沛人は『財貿戦線』新聞社の職員ではないから，我々はこの案件を引き受けたときにすでに声明を発表したのです。政治的に名誉回復はするけれども，他のことは一切考慮できない，と。」そう付け加えた。

馬玉如の前では僕は特に話はしなかった。僕は彼女の言外の意味がよくわかった。つまり1957年に朱沛人を右派にしたことは大きな間違いではなかった。今，右派のレッテルをはがすことは家族に与える恩賜と同情からである。思想教育に従事している人間はこのような発言をするのが当たり前であるし，与えられた任務であることは僕にもわかっている。父の案件について引き延ばして

解決してくれなかった理由は，彼女の話を聞く限りでは，僕ら家族が政策にのっとって経済賠償請求をするのではないかと恐れていたからのようだった。

新聞社を出てから僕は北京市中級人民裁判所受付を訪れた。受付は担当の鄧淑賢のところに行くよう，指示してくれた。しかし，鄧淑賢は今日会議があるから，客に会わないと言ってきた。僕は5日間彼女にコンタクトを取り続け，やっと一回だけ会ってくれた。会うまでにこんなに時間がかかったのは鄧淑賢が僕に会いたくなったからだ。会わない理由の建て前は特に話すことはないから，再審査の結果を帰って待てば良いということであった。

僕は毎日ここに来て，彼女に会いたいと言い続け，そしてはるばる地方から北京に来たことも主張し，どうしてもはっきりした回答をえたいと強く希望すると，彼女はついに慈悲を与えくれて，会ってくれたわけだ。彼女は「あなたはもう焦る必要はありません。この案件が引き延ばされたのは右派再審査を引き受けてくれるところがなかったからです。『財貿戦線』新聞社が朱沛人の案件を引き受けるという結論を出したのはつい先日のことですし，本格的に再審査を開始してまだそんなに時間がたっていません。目下，私は他の案件を数件抱えていることもあるから，朱沛人の案件の再審査はまだ時間がかかりそうで，すぐに結論を出すことが不可能だけれど，先に引き延ばすこともないと思います。結論が出次第，家族と職場に知らせます。今後はもうここに来る必要も，手紙を寄越す必要もありません。名誉回復することになれば，それ以後は関係規定にのっとってやりますから」と言った。

裁判所を出た後，僕はすぐに江西省に帰る切符を買った。阿敏は以前何度も手紙で，彼女が陳情に上京するときは，苦しくて，言葉で表現ができないほどだと記していた。僕は今回の上京で彼らのお手並みを拝見したと言えよう。しかし，父の徹底的な名誉回復の結論が得られなかったにしても，この最終結論が得られる期日までそう遠くないことが分ったことだけが，ささやかな慰めで

あると思った。

24.　予想外の特別な措置

北京で過ごす日々の中で，僕は気にかけていることが一つあった。それは自分の転勤問題だった。婉雲が生まれてからは，毎年夏休みになる前に，教育局へ潯溪中学校から比較的交通の便利な学校への異動願いを書いた。済が生まれると同時に何度も山を越えることは僕にとって，だんだんある種のいじめのように思えてきた。毎年異動を待ち望んだけれども，毎年当てがはずれた。去年の夏休みの前にも僕は5，6千字の長い異動願いを書いた。教師の配属というのは人間関係の密度によって決まることはわかっている。たくさんの人が県のトップと関係があるため，市や市外に配属され，関係のなにもないよそ者は流刑のごとく中心地から遠く離れた山間部へ配属されるのだ。しかし，このことには触れることができない。僕はただ幹部の同情と哀れみ，理性と公正性に希望を寄せるだけで，自分が 7年間この山間部にどれほど貢献したか，毎年の冬休みと夏休みに家へ帰る辛苦を事細かに説明した。僕たちが恨み言の一つも言わず山間部でこんなにも長く奮闘したが，今，現実問題として困難に直面し，その解決策が全く見当たらない，という瀬戸際に立っていることも書いた。僕たちに少しの配慮と便宜をはかり，仕事を有利にしてくれ，というわけではなく，教師の異動に積極的になるよう訴えたのだ。僕は現在の配属方法を変えるように希望した。人々がただ心から喜んで山に入り，さらに喜んで山から去るようにする。このようにすれば，山での仕事が手を焼くものだとは誰も思わないだろう。その届けを書いた時，僕はそれを学校の周先生に見せ，彼の意見を尋ねた。その異動願いの大半は僕が山に入り，山を出る道のりでの苦しみや，困難を描写したもので，彼はそれを見て，とても感動し，うまくいくようにと応援

してくれた。その年の夏休みが過ぎたころ，周先生は南昌の頼りになる後援者のおかげで，県城の省所属の炭鉱子弟学校に配属された。しかし，僕の異動は相変わらず杳として音信がなかった。

今回北京に訴えに来たとき，僕はまた時間を見つけて異動願いを書き，直接県の教育局に出した。北京から離れた後，僕は撫州で半月すごした。 8月中旬に急いで南城県に帰ると，教育局に自分の異動は希望があるのかどうか見に行った。僕は仕事を始めて以来，初めて教育局の事務室に来て，副局長がそこに座っているのを見た。来訪した理由を話すと，彼は呆然とした。なぜなら，彼は全く僕のような人間がいることを知らず，さらに何年も続けて僕が異動願いを出していることを知らなかったのだ。彼は「山間部にも誰かが行かなくてはならない。そこの先生がみんな異動してしまえば，誰が学校で教えるんだい。みんながいなくなるなどそんなことはありえないだろう。山間部で働ける事は光栄なことなんだよ」と言い訳した。そして手を振ると「君の問題はもう一度考えてみるよ，必ず」と言った。

僕はやっとわかった。毎年書いていた異動願いをこの幹部は全く読んだことがなかったのだ。自分が毎年山間部で異動を願いながら教鞭を執っていたのは，ただ僕の一方的な願望にすぎず，実は県が人事を考えるとき，僕の要求は全く誰も取り上げようとしなかったのだ。僕が教育局に送った何通もの異動願いは，もしかすると，事務の所で止まり，掃除の時などにゴミ箱に捨てられていたのではないだろうか。僕は自分がどれほど幼稚で，世俗にうとい学者肌であるかわかった。僕はがっかりして教育局を後にした。

世の中は常にこのように納得できないもので，途方に暮れた時，時に情勢は変化が多く，複雑である。 8月下旬，校長は県の会議から帰るとすぐ，「君の異動が認められたよ。県は君を株良中学校に配属することを決めた」と僕にお祝いを言ってくれた。この知らせを聞いても，僕はあまり信じることができなか

った。校長は僕に「君，今年北京に行ったかい」と尋ねたので，僕は行ったと答えた。校長は続けて「君が局長に出した手紙を彼は受け取った。君の手紙には「北京朱緘」と書かれていたので，彼は受け取ると北京から来た手紙か，と驚いた。手紙を見ると彼はやっと南城にまだ北京から下放された知識青年がいることを知ったんだ。彼は心から本当に大変だっただろう。北京から来た人が山間部でこんなに長い間働いていたなんて。きちんと配慮してあげるべきだ。と言っていたよ」と言った。局長のこのような言葉があれば，もう異動できないということはないだろうと思った。

本当に思いもよらなかった。今回北京に訴えに行ったお陰で，思いがけなくもこのような予想外の収穫があった。もしかしたら物というのは珍しいと言うことが貴重ということがあるかもしれない。ここには南昌と上海から下放してきた知識青年はとても多くいるが，北京からやってきたのは僕ただ一人である。もちろん，僕も北京の首都という光を受けたのだ。中国人の心の中では，北京は永遠にある種神聖な意味を持つため，僕も特別な待遇を受けることができたのだ。

9月 1日新学期の前に僕はついに潯溪中学校を離れた。家族みんなで僕の若い頃下放した株良公社に移り，株良中学校に家を置いた。学校は公道のそばに建っていて，県城から10kmしか離れていないので，交通はとても便利だった。僕は深くため息をついた。 8年の苦しみはついに報われた。僕はこれから気が狂ったかのように県城の大通りで車を探すことも，犬のように運転手に哀れみを請うことも，炎天下や，北風が吹く中，２人の子供を連れて旅の苦しみで心を煩わせたり，疲れ果てることもなくなったのだ。株良は潯溪のように涼しくない。山では盛暑の時でも昼寝をすると，必ず毛布をかけなければならない。今，季節はすでに秋になったけれども，まだ暑さは耐え難かった。しかし，嬉しくて，暑いことなど何も怖くなかった。この問題は僕が解決できたことは言

うまでもない。乗り合いバスに乗って県城に行き，扇風機を買ってきたのだ。それは僕の家が買った初めての電家製品だった。

25.　無実の罪を晴らす

1981年 9月の中ごろ，僕はついに北京市高等裁判所から再審理の判決書を受け取った。判決書にはこうあった。「原判決では朱沛人の歴史反革命の罪は事実であるとはっきりと認めているが，1951年すでに天津市公安局は朱沛人に対して２年半の保護観察の刑を執行しており，その後新たな罪は犯してはいない。その歴史に対して罪を再び追究されるべきものではない。右派の問題については1981年 6月12日において既に法改正がなされており，故に原判決が反革命罪を現在においても行っているということはできないものである。判決の結果をここに書き記す。(1)1958年11月20日本院でなされた第896号の刑事判決書を撤回する。(2)朱沛人の歴史的罪について二度と追究しない。」

この判決書を手に取っても僕は決して，特別喜んだり感激したりすることはなかった。歴史的反革命の罪に対する判決は，甚だ疑問を呼び起こさせた。父は解放前（1949年以前）に大小様々な新聞社に勤めていた間，反共産党の文章を書いたことはなかった。僕が知るところによれば，反動的な新聞を担当する職に就いていた多くの人は，解放後決して反革命のレッテルを被せられるということはなかったようである。当然これらの人々は解放後は上海にいたが，父は天津にいた。これは都市の大小により異なった形で，政策の執行において大きな差異があったのではないだろうか。父についてなされた歴史的反革命という判決は，一体何を根拠にしていたのか，僕たちは知ることはできない。それゆえ，有力な証拠を出し，さらに上告する方法は無かった。僕はまた父のために深く深くため息をつき，もし父が健在だったならばはっきりということがで

きただろう。

父が遭遇したこのことは，魯迅のことを連想せざるを得ない。20年代，魯迅は北京に住み，北洋の軍閥が請願する学生を殺害するという血なまぐさい事件に直面し，「紀念劉和珍君」（「劉和珍君を記念して」）を書いた。30年代には魯迅は上海に住んでおり，国民党政権が逆らった左翼の作家を殺害するという事件に直面し，「為了忘却的紀念」（「忘却のための記念」）を記した。魯迅は暴政に直面し激しい怒りを覚え，自らの筆を匕首や投げ槍として，怒りを言動に表しその脅威のもとで作品を作ったのである。当時の中国は「束縛は小さな壺よりもさらに隙間がない」ものだったが，彼の文章は絶えず様々な新聞の端々に見られたし，さらにこの文章によって鎖に繋がれ投獄されることもなく，災は妻子に及ぶことはなかった。父はただ党の呼びかけに共鳴し，３篇の穏やかな批判の文章を書いただけなのに20年の命と一家の前途と幸福を代価として支払ったのである。

父は正直なジャーナリストであり，国民党政権の腐敗を不満に思っていた。それなのに共産党の赤色政治は彼を許すことはなく，社会の大変革の時代において悲劇的役割を演じることとなった。実際にはこれは彼自身の悲劇ではなく，時代の悲劇であったのである。

20年も無実の罪を着せられて投獄されていた間に，家を無くし，肉親を失い，妻子とは離れ離れになった。３年近く訴え続け，日夜待ち望み，心をめぐらせて疲れ果ててしまった。現在，原判決を取り消す確固とした公文書があるだけであり，どの機関も人も顔を出して詫びるということは無く，何の慰めも補償もされなかった。僕の心の中はただずっしりと重々しく沈殿したおりのような鬱々とした気分になった。僕は父が名誉回復されたことによって，どんな経済的補償が得られるかなどとは考えていなかった。僕たち一家が政治によってどんなに大きな傷を負ったか話さねばならないと思っていただけだった。わずか

に信頼していた裁判所から冷酷な「原判決を無効にする」，「追究を認めない」といういくつかの言葉が提出された。たった数言だけで一切を正面から受け入れるのは，難しすぎるのではないだろうか。

僕は多くの悲惨な迫害を受け，遂に名誉回復を獲得した人をみたが，彼らはこの恩徳に感謝し，万歳を唱えていた。組織はこのようにするべきであるとし，彼らにあのような行動をとらせるよう強制しているかもしれなかった。彼らはやむをえずあのようにせざるをえなかったのか，それとも自発的に喜んでいたのか，知らず知らずのうちにあのような行動をしいたのか。しかし，いずれであっても滑稽であると僕は思う。感謝しなければならないのは，被害者ではなく，彼らに危害を加えた加害者のはずである。これらの人間が被害者の忍耐と寛容，寛大さと闊達さ，遺恨にこだわらず前向きであることに感謝しなければならないだろう。遺恨を残した被害者は総じて弱い立場にあった人であり，彼らの大多数はすでに人として享受すべきいかなる権利も知らず，そのために，まっとうな人としての権利をとても長い間受けていなかったのだ。

ほどなく阿敏から私に手紙が来た。それは父がついに名誉回復がなされたことを喜ぶものであった。彼女は僕に祭文を書き，天にいる父と母の霊に20年間晴れなかった罪はすでに晴らされ，これで両親共に心安らかに眠れることを告げてほしい，と言ってきた。

僕は筆を手に取ったが，どれだけ長い時間をかけても，話さねばならないことをありのまま確実に文字に現すことはできなかった。最後に4首の祭詩を記そう。

片言罹難甚荒唐， 廿載幽囚歿北疆。 千里孤墳何処是？	断片的な言葉によってでたらめな迫害を受け， 20年もの間幽閉され，北の地に没した。 千里の彼方にただ独り，貴方の墓は一体何処にあ

るのだろうか。

天涯一望断人腸　　果て無き空を見渡して，断腸の思いに駆られている。

一紙空頭改判書，　　ただ一枚の空しいばかりの判決変更書で，
霊前告祭意何如？　　霊前に立ちあなた方に一体何を告げればよいのだろうか。
満腔悲憤無説処，　　胸にいっぱいのこの悲憤を話すところなどない。
況是人亡家破餘！　　家を無くし肉親を失ってしまったのだから。

母葬京郊父嫩江，　　母は北京の郊外，父は嫩江に離れ離れに葬られ，
孤魂月夜倍凄惶。　　孤独な魂は月夜の晩にさらに悲しみを募らせる。
年年断腸清明日，　　毎年，清明節の日には断腸の思いが募り，
泪眼婆娑望北方。　　北の彼方を望んでは涙がはらはらと落ちる。

荒墓想已被人平，　　荒れた果てた墓はすでに平らにされ，どこにあるさえわからない。
芳草天涯歳又春。　　芳しい香りが空の果てまで届き，時はもう春となった。
料得夜台非寂寞，　　けれども夜にはどうしても寂寞たる思いを抱き，考えずにはいられない。
人間随処有冤魂！　　この世のいたるところに無実の魂があるのだろう。

僕の心は重々しいけれど，結局このことは，すでに永遠の歴史の中のほんの過去の 1ページにすぎず，僕ももはや，犬っころなどではない。僕は民主とい

う希望の光がついに現われたこの時代を喜んでいる。この世とも思えないほど悲惨な歴史的災禍を決して，二度と繰り返してはならない。さらに，娘と息子を授かったことは喜ばしいことであり，彼らが僕と同じように賤民として生活する必要はないのだ。彼らは新しく無限に広がる素晴らしい人生を歩むべきだから。

註

(1)　張詒和　『嵐を生きた中国知識人　「右派」章伯鈞（しょうはくきん）をめぐる人びと』（横澤泰夫 訳 集広社　2007年）。中国語版『往事并不如煙』は2003年に北京人民出版社より発売されたが，やがて発売禁止処分を受けた。

(2)　反右派運動　1957年に中国大陸で起こった反ブルジョア右派の政治運動のこと。1956年11月に中国共産党は八期二中全体会議を招集し，次年度から党内で整風運動を開始することを決めた。1957年 4月27日に党中央が『整風運動の指示について』を公布し，人民内部の矛盾を正しく処理することを主題とする反官僚主義，反宗派主義，反主観主義の整風運動をすることを決めた。広く民間人に党に意見を述べるようにと呼びかけた。共産党以外の民主党派や知識人，民間の一般人は呼びかけに積極的に応じた。しかし，同年 5月15日に毛沢東は『状況は変化しつつある』を発表し，右派の攻撃に気をつけるべきだと注意を促した。ここから意見を述べた民主党や知識人らに対する徹底的な弾圧を展開した。共産党に意見を述べたことのある人，彼らに関係の近い人はほぼ右派と認定された。また各職場に一定の割合の人を右派とすることまでも指示した。運動は拡大され，55万人の人が右派とされてしまった。彼らはやがて強制収容所に送られ，過酷な運命をたどった。

　文革収束後の78年～80年に，右派とされたほとんどの人が名誉回復された。

(3)　土地改革　1950年6月30日に中央人民政府が『中華人民共和国土地改革法』を分布した。「地主階級による封建搾取の土地所有制度を廃止する。農村の生産力を解放し，農業生産を発展させ，農民を主体とする土地所有制度を実施する。新中国の工業化実現のために道を切り開く」と宣言し，3億人の土地を持たない，または土地の少ない農民に 7億ムー（土地の単位。1ムーは6.667アール）の土地を分け与えた。

(4)　三反五反運動（1951年11月～52年 8月）　共産党指導の下で，政府機関，学校，団体，軍隊などで実施した政治運動。三反とは反汚職，反浪費，反官僚主義である。五反とは反賄賂，反脱税，反国家財産の横領，反手抜き仕事と材料，反国家経済情報の窃取である。運動は民族資本や私営商工業に手厳しい打撃を与え，違反者を多く処刑した。

(5)　大躍進運動(1958年～60年)　全国民を総動員し，急進的な政策の下で農村で人民公社（注18）の設立や現実離れした鋼鉄と穀物の無理な増産を計り，理想の社会を目指そうとした運動。この運動は国の経済が破綻に瀕し，失敗に終わった。

(6)　『武訓伝（ぶくんでん）』の批判　映画『武訓伝』は1950年12月上映され，好評を得た。ストーリーは清末生まれの武訓は貧しい故にあらゆる屈辱に耐え，豊かになってから学校を起こし，貧しい師弟を迎え入れ，勉学させるというものであった。51年 5月20日に毛沢東が文章を発表し，映画「『武訓伝』は農民の革命闘争，歴史，中華民族を侮辱した」と批判した。矛先を知識人に向け，知識人に思想改造が必要だと暗示した。

(7)　梁漱溟(1883年～1988年)。思想家，教育家，哲学者，社会活動家。毛沢東と親交があったが，1953年に毛沢東の農村政策に異論を唱え，毛の反感を買い，激しく批判を浴びせられた。文革中に迫害を受ける。文革後に名誉回復され，学術活動を再開し，『人心与人生』などの著書を出版した。95歳で没。

(8)　胡風反党集団の逮捕　胡風（こふう）（1902年～85年）現代文芸理論家，詩人，文学翻訳家。

1954年 7月に胡風が文芸に対する自らの考え方をまとめた30万字の長編レポートを中国共産党政治局に送った。1955年 1月20日に中国共産党宣伝部が『胡風思想に対する批判の報告』を中央政府に提出した。さらに，5月に毛沢東が『人民日報』に胡風をはじめとする人々のことを，「革命陣営に潜伏している，中華人民共和国を転覆し，帝国主義国民党を復活させることを任務とする反革命派閥だ」と断定した。5月18日に胡風をはじめとする92人が逮捕された。このように，「胡風反党集団」への批判が高まり，全国で2100人に波及し，62人が隔離され取り調べられ，73人が停職させられた。胡風には無期懲役の刑が言い渡された。1978年に名誉回復され，翌年に釈放された。1985年死去。

(9)　百花斉放，百家争鳴「双百方針（そうひゃくほうしん）」ともいう。1956年4月28日に毛沢東が中国共産党政治局拡大会議で文芸策として提唱した。「百花斉放・百家争鳴は我々の方針にしなければならない。芸術においては百花斉放にすべき，学術においては「百家争鳴」にすべきだ」と。

百花斉放とは，様々な花を咲かせ，芸術の面では様々な形の芸術作品の出現を歓迎すること。百家争鳴とは，学術においては異なる派閥の意見を許容すること。

⑽　下放　1960年代～70年前半までに，都市から幹部や知識青年（中・高校を卒業した青年）を農村，工場，鉱山などに行かせ，肉体労働に従事させた。多くは左遷や矯正労働の意味が含まれていた。

⑾　上山下郷　1956年に中央政府は都市での就職以外に農村に行き，社会主義の建設に参加するようにと呼びかけたことがあり，いわゆる「上山下郷」のことである。1968年12月毛沢東は「知識青年は農村に行き，貧農下層中農の再教育を受けることが大いに必要だ」と号令を発した。69年から組織的で大規模な「上山下郷」運動が全国に広まった。文革中にろくに勉強できなかった中・高校卒業生の就職問題がこれで一気に解決することになった。彼らを含め多くの若者が雲南，貴州，湖南，内蒙古，黒竜江などの辺鄙で農業生産力のもっとも低いところに一度に約1000万人が送り込まれたという。完全な統計ではないが，50年代後半からすでに毎年100万人単位で若者が農村に送り込まれたという。70年代以後，短大や大学の受験，病気，都市への就業などの理由で少しづつ都市に戻る人が出てきた。78年以後，“上山下郷”運動を中止し，79年以後に残留知識青年たちは相次いで都市に戻ってきた。しかし，様々な原因で10万人の知識青年は永遠に農村に残ることになった。

⑿　撫州　地名。江西省東部の町。

⒀　五七　毛沢東の‘五七指示’のことを指す。1966年 5月 7日に毛沢東が林彪（注17）に書簡を送った。中では「軍隊は大きな学校であるべき，」であり，政治，経済，文化，生産活動を行わなければならないと主張した。なお，中央政府機関，農民，労働者，学生に対しても，同様に要求した。以後，毛の言葉を’五七指示’と称する。この指示を実践するために，政治運動で批判された幹部などの思想教育と労働の場として，田舎に農場を建設した。これを「五七幹部学校」という。これにちなんで，各種目の「五七……学校」，「……五七農場」の形の組織が現れた。

⒁　県　中国の行政単位の一つ。一般的に「省，自治区，直轄市，省轄市，自治州，県…」という順位である。県城は県の人民政府の所在地を指し，県の中心である。

⒂　紅五類　労働者，貧農，下層中農，革命烈士，革命的幹部及び人民解放軍の子弟のこと。文革初期においては紅衛兵メンバーを指す。

⒃　黒五類　地主，富豪，反革命分子，悪質分子，ブルジョア右派分子のこと。

⒄　林彪事件　林彪(1906年～71年)。軍人，政治家。建国後に共産党副主席兼国防相を

務めていた。文革で毛の後継者とされていた。71年 9月にクーデターを企てたが，発覚し，ソ連に逃亡中に飛行機が墜落し，死亡した。以後，林彪反党集団への批判が全国に繰り広げられた。

⑱　人民公社　1958年に設立，83年に廃止される。中国農村の行政，生産，社会基層組織のこと。毛沢東は土地および生産手段の集団所有化と労働の集団化を図り，1958年に行政・経済を一つにまとめた人民公社を生み出した。

⑲　臭老九　文化大革命時，知識人に対する蔑称。九番目に数えるくだらないものの意味。

⑳　造反派　毛沢東の言葉「造反有理」とあり，これは文革初期のスローガンであった。造反有利とは反逆を起こすことには道理があり，造反することは正しいとする考え方。当時の政治的一派を指す。

㉑　工農兵大学生　文革期にすべての大学は入学試験を停止した。新入生は労働者，農民，兵士から推薦で大学に入学していた。募集定員は中央が下級機関に振り分けていた。選考基準は学力よりも共産党に対する忠誠心の有無や政治的な態度が良いかどうかを最優先に考えた。

㉒　嫩江農場　黒竜江省嫩江県（同省西北部にある）の中心部から18キロ離れた東南部に位置する。1955年黒竜江省公安庁が強制労働収容所（労改農場）を設立する。刑のもっと重い「右派」を収容したことで全国的に有名である。

㉓　変面　服や仮面が早変わりする四川省川劇（せんげき）の伝統芸能のことを指す。

㉔　映画『牧馬人』　1980年代前半の中国映画。教師をしていた許霊均（きょれいきん）は57年に「右派」とされ，西北の草原に下放された。過酷な現実と厳しい政治的な差別に耐えきれず，自信をなくし，自ら命を絶とうとしていた。しかし，四川省から飢饉で逃れてきた心の優しい女性に助けられ，二人はやがて夫婦となる。文革後に許霊均は名誉回復され，妻子とともに町に戻り，再び教鞭を執ることができた。日本で86年に公演された。

㉕　老三届　文革初期の1966，67，68年に卒業するはずだった中学生あるいは中・高生のこと。この時期に学校はほとんど機能しなかった。文革収束後，1977年に大学受験が裁可され，大学入学希望者の「老三届」に対して受験を特別に認めた。

㉖　北大荒　黒竜江省の東北地区の興凱湖（きょうがいこ）を中心にする大湿地帯を指す。文革中に北大荒地域に多くの知識人青年が下放され，また50年代後半から一部は「右派」たちの強制収容所にも充てていた。自然条件や開墾の条件が過酷なため，流刑の地や北方の大荒野の代名詞にもなっていた。

(27)『参考消息』 1980年代以前は，中高級幹部のみ内部閲覧が可能だった新聞。主に外国（西洋）についての記事が書かれていた。

(28) 党性　共産党員としての性格のこと。プロレタリア階級の階級性の集中的表現。

(29) 中央五部　中国共産党組織部，中国共産党宣伝部，中国共産党統戦部，中国共産党公安部，中国共産党民生部を指す。